
TM ～休載中～

和藤渚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TM〜休載中〜

【Nコード】

N1687D

【作者名】

和藤渚

【あらすじ】

とある転校生に振り回される話。ストックがなくなったのでしばらく勝手ながら休載させていただきました。楽しみにしていたみなさん本当に申し訳ございません・・・

第1話 転校生に・・・

4月8日 新学期。今日も雲ひとつない晴天。

いつものように学校に行き、いつものように友達とわいわい騒ぎ、いつものように部活にいきそんな平凡な1日が始まるはずだった・

・
「どうしよーやばいブレーキがー！！どいてー」

と言いながら俺のほうにだんだん突っ込んでくる

「おい！だからって何で俺のほうにくるんだよー」

と言いつつ逃げ切れず、

「あゝぶつかるー」

ずどーんという大きい音とともに俺たちは倒れた

まず目に入ったのは大きな胸、さらさらとした長い髪、そしてアイドル並みのかわいい顔

(めっちゃかわいいじゃん！！)

と俺は思った。一見とても清楚でどこか抜けているオトボケキャラのようなイメージだった。そして次の瞬間イメージはもろくも崩れ去った・・・

「痛たたた！！ちよつとどこ見て歩いてんのよ。ちゃんとどいてっ
て言っただでしょー！！」

と俺に言いがかりをつけてきた。一瞬周りの時間が止まった

「それはこっちのセリフだよ！！どこ見て乗ってんだよ！！おまえ
どこに目ついてんだよ？それは飾り物か？一度目移植してから学校
こい！！」

と言り返す俺。

「うるさいわね！！だつてしょうがないじゃないスピード出しすぎ
てブレーキが止まんなかったんだから。それにちゃんとどいてっ
言っただでしょ？だけどどかなかった。あなたの方こそ耳が悪いんじ

やない。一度病院行ったほうがいいわよ」

と負じと反論する彼女

「あんなんどけるか！ーどんなトップアスリートでもよけれんわい
！！」

と俺が言つと彼女はすかさず

「あゝそうなんだ。運動神経ないんだ。ならどけないわね」

「なんだと！！」

「なによゝだつてほんとのことでしょ？」

お互い譲らずだんだん言い争いはヒートアップしていき、いつのまにかやじうまの人ばかりができていた。すると突然俺は誰かに頭をどつかれた

「いつまでけんかお二人さん？はやくしないと始業式始まるぞ」

その声の主はおれの友人の園田だった。その一言で言い争いは終止符がうたれた

園田とは園田憲太郎。彼はとてもモテる。2ヶ月前のバレンタインデーもチョコレート30個以上もらったという。いわばこの学校のアイドルなのだ

「けがとかねえゝか？一応保健室行くか」

と声をかけて手を伸ばした

結局俺たちは保健室に行き治療してもらった。けがはしたがかすり傷程度だった

俺は塚瀬智明 龍聖中学3年 特別けんかも強いわけでもないし、女の子にモテるわけでもない、勉強もそこそこ、スポーツもそんなにできるわけでもない。ごくふつうの中学生。

しいて特技をいえば卓球だ。と言つても試合では2、3回戦ですぐ

負けてしまっただが・・・

家族は3人。と兄と姉がいてそして俺だ。両親はいない。なぜなら両親は僕がまだ小さいころに無くなった。母は病気で、父は仕事
中の事故でだ。兄と姉は働いていてほとんど家にいない。

結局俺は始業式に遅れてしまった。体育館で園田と話していた。もちろん話題は校門でのこと

「さつき何があっただよ」

と聞かれ一部始終を話した

「ハハハそりゃ災難だったな。でもあの子かわいくね？転入生かな？あの子ゼッテモてるだろうな？お前にはもったいないって」と園田が言つと

「知るか。だれがあんなやつ。あいつがモテてようと俺には関係無い。」

と俺は言つた

「なんのことだよ？なあなあなんの話だよ？」

とみを乗り出すように会話に参加してきたのは俺の友人浜島だった

「おい！！言うなよ」

おれは慌てて園田の口をふさごうとしたが

「なんか転入生らしき女の子とケンカしてた」

と言ってしまった

「まじで！！まじで！！智明が？どんな人？」

と興味津々で聞いてくる

「めっちゃかわかったぞ智にはもったいないほどにな」

また浜島に興味をわかせるようなことを言った

「おい！どの子だよ教えるよ」

と執拗に聞いてくる。

一番厄介な人に知られてしまった。

浜島は俺の友人の中で一番女に飢えてるのだ。だからこういふ話には必要以上に食いついてくるのだ。そしてかわいい子には目が無い。

始業式がおわり俺は新しい教室がある廊下にいた。

「憲ちゃん、お前何組だった？」

と俺はきいた

「3組。あのゴリラ男のクラスだよ。おまえは？」
と答える

ゴリラ男とは体育教師の平屋のことである。身長193cm体重98kg大学までラグビーをやっていたらしい。高校では花園で準優勝したというまさにゴリラである。

「おれは2組。藤岡のクラス。」

「俺も俺もまた一緒だな」

「そうか祐一もか」

祐一とは浜島のことである

浜島と園田と話してると

「聞いたわよ今朝のこと」

と突然後ろから声が聞こえた。びっくりして振り向くと幼なじみの里奈だった

「おつ里奈どうした？」

と返事すると

「どうしたじゃないでしょ！！自転車と派手にぶつかったんでしょ？ケガとかなかった？」

骨とか折れたりしてない？病院行かなくていい？ただでさえぼーっとしてんだから気をつけなきゃ。」

とまるで親のような口調だった

「うるさいな大丈夫だよ。なんでいつもおおげさなんだよ？たく心

配性なんだから。」

とやれやれという感じで俺が言った。すると里奈はほっとした様子で「今日はお母さんから買ひ物頼まれててそれから来るね。今日何が食べたい?」

と言った

「おいおい! 今日もし奈ちゃん来るのか? いいな俺も早くそういうことしてえ〜よ」

とつらやましそつに浜島がいった

「おい? おまえ何言つてんだよ?」

「もう済ませたじゃねえ〜のかよ?」

と浜島が言つと

「だからなんのことだよ」

とおれが聞くと

「あ〜もうわかんねえ〜かな〜HだよH。」

と浜島が言つた

「バカかお前は! ! するわけねえ〜だろそんなこと! !」

呆れ顔で俺は言つた

「たとえ幼なじみとはいつても男と女だぜ? そんな気持ちになんねえ〜のかよ?」

と浜島は言つ

「ああ〜なんないね。ガキン時から一緒にいるから。そんな風に見れんわ! たしかにかわいくはなつたけど・・・」

と浜島に反論した

「なんだよ! ! かわいくなつたけどってやっぱ気があるんだ?」

と園田にからかわれた

「そんなんじゃねえ〜よ」

言い返すと

「何言つてんだよ? 顔赤くなつてんぞ」とまたからかわれた

そうなのだ両親が死に兄と姉が働き出してから家が隣同士ともあって毎晩里奈が自分の家の夕飯を持って来てくれるようになった。最近では里奈が料理してくれるようになったのだ。小さい頃は兄か姉が帰ってくるまでいてくれた。どっちも帰らない時は一緒に寝たこともあった。その時は姉が2人いるような気がした。

それぞれ新しいクラスの教室に入り、ホームルームが行われていた。「新しいクラスになって前と同じクラスの人もいれば初めての人もいます。みなさんお互いに仲良くやっていきましょう。それからあなたたちは受験生です。ちゃんと勉強の方も頑張ってください。それでは転入生を紹介しよう桜井メイ力さんだ。」

と担任が紹介すると、教室の中が大フィーバーになった。まるで有名人がきたかのようだ。

かわいいとか、モデルたいとか、胸でけーとか、いきなり僕と付き合ってくださいなどとコクするやつまであらわれた。園田の言う通りだった。その瞬間からクラスのアイドルにのしあがったのだ。学校のアイドルにまで上り詰めるのは時間の問題だろう。

そして、メイ力は俺の隣の席になった。

「そういえば、塚瀬。おまえ今日始業式遅れたみたいだね。どうしたんでしょう?」

と担任が訊くと

「桜井さんに自転車ぶつけられて、言いがかりをつけられてました。」

と俺は事実を言った。

「そうなんですか?」

とメイ力に確認する

「なんのことですか?そんなことしませんよ。それにこの人初めてみますよ」

と答える

「なにしらばつくてんだよ節穴！！ちゃんと移植したのか？移植してこいっていったる？聞いてなかったのか」
と言った。

「ひどい私なにもしてないのに」

と彼女は泣いてしまった。そして彼女はこっちを見てニヤけた。

「ウソ泣きですよ！！こいつ」

クラスの男子から彼女がそんなことするわけないだろ？と批難され女子には女の子を泣かせるなんて最低と批難された。

「・・・でよ俺学級委員になってしまつてほんと最悪な1日だった。なんで俺のときとみんなときで態度違うんだよ。つつか飯まだ？」
と家で里奈にグチッていた。

「ちよつと待つててもうすぐできるから。まああのこらしいわね」
と里奈が言つとチャイムが鳴った

こんな時間に誰だろうって思いながら出てみると

「こんばんは」

と一番嫌なやつだった。

第2話 パーティーで・・・

「げっ！！なんでおまえがここにいるんだよ？」

「げっ！！ってなによげって」

「こんなとこに何しに来た？節穴女」

「呼ばれたのよ」

「誰に？」

「誰でもいいでしょ？別にあなたに関係ないし」

「おおありだよ！！ここは俺んちだ」

「そんじゃ入るわよ」

と入ろうとする彼女を外に出した

「なにすんのよ」

「勝手に人の家にはいるうとすんな」

と言い争っているときと里奈が出てきた。

「あらメイカどうしたの？」

とメイカに問いかける

「どうしたのじゃないよ里奈ちゃんがよんでんでしょ？」

どうやらメイカと里奈は知り合いらしい。まず俺は

「すいません、2人の間柄は？」

「いとこなの」

「いここ」

と2人同時に言う

「そうですか。それはそれとしてどうゆうことだよ里奈？」

と俺が聞く。里奈がしばらく考え込んだ。そして思い出したように

「そうだ！！思い出した。この間メイカの歓迎パーティーをしよう

って言ってたんだ」

「でなぜにうち？」

とまた質問する。

「うちは今晚家族でご飯食べに行つて、いま私しかないの。家のカギいえに置いてきちゃつて入れないの。それでメイカの家は引越したばかりだからまだダンボール箱ばかりで入れる状態じゃないのよ。だからお願い」

「いつ家族はかえるんだ？」

「たぶん11時には戻るとおもつ」

「わかつた。わかつた。はいれよ。勘違いすんなよ節穴女。里奈に頼まれたからするんだからな」

ということとで3人で食べることになった

俺がご飯をつぐことになった今日のメニューはカレーなのだがパーティーでカレーだけじゃあんまりだとまた里奈は台所に戻つていった。すると

ピンポンとまた家のチャイムがなった

「今度は誰だよ？」と出てみると

「ちわゝつす」

「こんばんは」

それは園田と浜島だった。

「何しにきたんだよ？」

「なにしにつてお前英語の教科書忘れてたからとどけにきたんだ」
（まずい！！今ここで桜井がいるつてバレたら憲ちゃんとはとかく祐一になににいわれるかわからない）

「ありがとう」

「おう。じゃあな！！」

と二人が出て行く。ほつとするのもつかの間。

「あ！靴が3つ！！これは智明、これは里奈ちゃん、これは・・・」
と浜島が余計なことに気づいてしまった。

「姉貴のだよ」

と苦し紛れに言い訳すると

「それはない美穂さんはもうちょっと大きいもん」

（するどい！！さすが祐一。じゃなくて嘘を考えなくては）

と必死に考えるが、でてこない

「それは、その・・・」

「あやしい・・・入ろうぜ、憲ちゃん」

「待てっつかって人んちはいんな」

「そうだよ。祐一やめとけて」

とノリ気ではない園田を連れて強引に家に入っていた

「わりいくな智。すぐ帰るから」

「こんにちは里奈ちゃん。それにうちのクラスに来た転校生ジャン」

「あらどうしたの浜島くんたち」

「どうも」

「実は智が忘れ物してね届けに来たんだよ」

と園田が言つと

「ごめんねわざわざ。せつかだから食べていかない」

と里奈がお礼を言う。

「おい！里奈？」

「いいじゃない。多いほうが楽しいし、それに親しい友人がいれば

メイカも安心でしょ？」

と里奈が説得した。

「そうですよね？多いほうが楽しいですよね？つとその前に」

浜島は俺を玄関につれだし

「おい！これはどういうことだよ？きっちり説明してもらおうか」

とものすごい形相で詰め寄ってくる。

「これはいろいろと事情があつて成り行きというか・・・」

口ごもる俺。

「だいたいなお前だけずりいぞ。里奈ちゃんという人がいながら

」

「何勘違いしてんだよ！！だれがあんな節穴女。猫かぶるようなや

つだろくなやつじゃねえ」

ということとで2人増えて5人で食べることになった

俺はご飯を入れてルーをいれてみんなにだした。里奈は

「はいよ」

「なんかお前がつぐのって違和感あるな」

「言えてる。いつも里奈ちゃんにやってもらってるもんな。」

「うるせー」

「そうなんだ」

と積極的に話に入ろうとしているメイカ。

「小さい頃から里奈ちゃんにべったりだよ」

「そうそうしかも泣き虫だよ。」

「いじめられたり、転んだりするたびに泣いてよ。」

「一番困ったのが鬼ごっことかかくれんぼとかの鬼に何度もなると数えているうちにだんだん泣き出すんだよ。そのたびに里奈ちゃんが慰めたもんだ」

「まあ無理もネエ」。両親は小さいときに亡くしてるし、兄弟はいるけど年は近くても10歳離れてる上にほとんど働きづめで家に帰ってこなかったから事実上里奈が親代わりみたいなのとこあったからな」

（こいつだつて苦労してるんだな・・・）

と園田たちは俺の小さい頃の話をしていた。その間にたくさんの料理を持ってきてきた。

「何しんみりしてんだよ食べるぞ？」

「いただきます」

みんなじつにおいしそうに顔して食べてる中、一人様子がおかしい人がいた。それはメイカだ。

動きが止まりしだいに顔が険しくなってきた。そして耐え切れず

「からーーーーー!!!」

「こついうこともあるのかと思ってな通常の5倍の辛さの唐辛子を大量に入れたんだよ」

「ただ単にお兄さんとお姉さんが辛いのが好きなかっただけでしょ？普通の唐辛子じゃ物足りないから。いつもそれ使ってるの。ごめんね。智明ちゃんとあやまりなさい」

「いやだね。なんであいつなんかにあたまさげなきやいけねえんだよ」

「＃\$<>!*&(やってくれたわね)」

「どうやら辛さでろれつが回ってないようだ」

「ざまあみる節穴女、俺の恨み思い知ったか」

おれはしてやったりだった。

「へえ、そんなに辛いのが好きなんだ」

と怒り心頭の様子であった。

「そんなに好きなら、そんなに好きなら全部くれてやるわよ」

と皿ごと俺の口に入れられた

「ゴホッホッホ。辛れー」

のちに悶絶した。

「いい気味、まさに自業自得ね」

「ちよつと2人とも」

「やめとけって」

と止めに入る里奈と園田。

「やったなこのやろっ！」

とおれはメイカのサラダにこっさり大量の砂糖をいれた
食べて悶絶するメイカ。

この後から揚げに大量の酢をかけたり、ジュースに大量の塩をいれられたりした

「もういい加減にしなさい二人とも!!」

それにしびれを切らした里奈であった。しばらくして

「もう一杯いこ」

「おら!!しっかりしろ翔太。家ついたぞ」

となにやら男と女の声が聞こえた。どうやら兄と姉が帰還のよう

だ。

時計を見ると10時半を回っていた。

そして居間に2人が入ってきた

「お！美少女が二人。姉ちゃんいつの間に制服パブにきたの？」

「ばかかお前はここは家だ」

頭をたたいていった

「巨乳美少女。うわゝ天国だゝ」

と兄は2人に飛びついた

「きゃゝちよつと。もうまた」

「やめてくださいよ！！」

と里奈とメイカの胸をもみ始めた。

「ねえ君達何カップ？」

と兄は聞いてきた

戸惑う2人。

見かねた姉が肘鉄を食らわせて

「何中学生をくどいてんだよ？」

兄はのびた。

「ごめんよ、いつもいつも、里奈ちゃん、それに・・・」

「初めまして桜井メイカです」

「里奈のいとこで俺のクラスメートだよ」

「3人の男が2人の女を奪い合う。まさに修羅場だね」

「違うってそんなんじゃないから！」

「まあがんばんな。」

「だから違うって。」

とからかって部屋に戻っていった。

そしてパーティーは終わり里奈は家に帰り、メイカを家に送ることになった

「なんであんたに送られなきゃいけないわけ？ここまででいいって」と嫌がるメイカ。

「しょうがねえゝだろ憲ちゃんたちとは反対方向だし、女1人で夜

道を歩くのは危ないからって無理やり姉貴にいかされたんだから」と逆ギレした。

「なんかすまねえ〜な俺のバカ兄貴が。ならここまで。気をつけて帰れよ」

「いいのよ。酔っ払いのあつかいなれてるから」

と踏み切りのところで分かれた。メイカが踏み切りでこけて立ち上がれないでいた。

すると遮断機がおりて電車が来てしまった。まわりにはだれもいない。

非常ボタンも間に合わない。おれはとつさに踏み切りの中に飛び込んだ。メイカを抱きかかえ脱出した。

「危なかったな。大丈夫か。見せてみ？」

自転車でぶつかったときと反対側をけがしていた。

「立てるか？」

「ええ大丈夫よ。あなたが心配するほどやわじゃないわよ」

と立ち上ったが歩けそうになさそうだった。

「ほれ」

と俺はしゃがんでメイカをおぶろうとしたがもちろん断られた。

「いやよ。なんであんたにおぶってもらわないといけないのよ」

「ばかか！歩けねえ〜のにそんなこと言ってる場合かよ」

「いやだっていつてるでしょ！！！！」

「桜井！！」

メイカはしぶしぶ納得した。そして家まで送りあいにく両親が留守だったのでケガしたところを消毒して帰った

「メイカ？新しい学校やっていけそう？」

「うん。楽しくやっていけそう。」

第3話 引越しの整理で・・・

そしてその週末

ほんの小さな出来事に愛は傷ついて

という携帯電話の音で目が覚めた

「もしもし」

「あ！もしもし智明ちよつときてもらいたいところがあるんだけど・・・」

声の主は里奈だった

そこには園田と浜島もいた

「でなんで俺たちが桜井んちの整理をしなきゃいけないえーんだよ！家族のやつはどうした？それになんであの2人もいんだよ」

「しょうがないでしょ？両親が出張なんだから。ほら文句言わずに働く」

と里奈がなだめた

「たく引っ越してそうそう出張かよ。どんな会社に勤めてんだよお前の親は？」

「メイカちゃんの手伝いなんてなんて幸せなことだ。なあそう思わない？そう思うだろ？」

としきりに浜島が同意を求めてきた

「あゝ！もううるせー！！」

「なにかあればいつでもとんできますよお嬢さん？」

「なにくどいてんだよ、憲ちゃん」

「お姉ちゃん？僕はどうすればいいの？」

「あんたはとりあえず自分のものを整理して」

「あ！里奈お姉ちゃんだ」

「久しぶりね文也。」

「これ弟。こら文也あいさつしなさい」

「ものあつかいするな乳だけ女。どうも弟の文也です。よろしく」

「誰が乳だけ女だってクソがきが」

とメイカが文也の頭をグリグリした。

それに俺はみとれていた。

「智明？智明」

「あ！なに？」

「なにぼーつとしてんの？」

「あ！ごめん」

「やるよ」

と里奈が俺を正気に戻した。

「園田君、お皿やお茶碗はあの棚にいれてグラスはあっちね」

「メイカちゃんこれは？」

と浜島が聞く

「それはそっち。」

とメイカが答える

「智明？ちよつとここおさえて」

ともくもくとみんな整理打ち込んでいた。そしてひと段落がつき昼食を食べることにした。

「今日、弁当作ってきたのみんなで食べようよ」

「うまそう、いただきます」

「うまい！！うまい！！やっぱ里奈ちゃんの料理うまいわ」

とおいしそうに食べてる。

「私の好きなコロツケ」

とメイカが食べようとする文也が奪った。

「なにすんのよ？」

「だって僕も好きなんだもん」

「これも貰い」

とまた文也に捕られてしまった。そのせいで

「あんた食べなくても働けるでしょ？皿の中身よこしなさいよ」

と俺はメイカにすべて取られた

「おい！なにいつてんだよ日頃の行いが悪いから弟になめられんだよ、節穴」

「その通りなんですよ、お兄さん、この人ねひどいんですよ？」

と文也からは小さい頃電池を投げられて頭に全治2週間のケガをさせられたことや靴に画鋲をいれられたこと、捨てられたカーペットをまかれて川に投げられたことなどを話してくれた。

「すげえ俺想像できる」

「私も・・・メイカらしいわ」

俺と里奈が行った

「おれは想像つかないな」

「俺も、メイカちゃんがそういうことするように思えない」

園田と浜島はそう言った。

「みなさん、このルックス、このスタイルに騙されないでくださいね」

と文也が警告した。

「それってどういう意味よ？」

「言った通りだよ」

「言わせておけばくそがきが」

また文也の頭をグリグリしたところで再び作業が始まった。

みんなテキパキと仕事をこなし、作業が進んでいく。作業も終わりがけた時

俺は1つのダンボールに手を伸ばした。

すると気づいたメイカがすごい顔つきで走ってきた

「これにさわっちゃだめ～～！！」

そしてつまずいてダンボールは倒れ、彼女は転んだ。

中から彼女のおられる下着が大量にでてきた。

「イタタタ・・・」

「D-cupか。やっぱ大きいと思ったよ」

と園田が言った

「ちょっとみないでよ！！エッチ！！変態！！人の下着をあさるなんて最低！！」

と俺につつかかってきた

「なんで俺がいわれなきやいけねえんだよ。だいたいお前がこけたのが悪いんだろ？」

「もとはといえばあんたがそのダンボールを開けようとするからでしょ？」

「下着が入ってるって知らねえもん。ダンボールに書いとけよ」

「急な引越しだったから時間無かったのよ」

と言い争いをしてると

浜島の様子がおかしいことに気づいた

「祐一どうした？おい？」

どうやらD - cupという言葉がクリンヒットしたらしい

「D - cup」メイカちゃんはD - cup

とはしゃいで鼻血をだして倒れた。

「おい！祐一大丈夫か？おゝいしっかりしろ」

とビンタするが反応なし

「だめだ・・・完全にいつてる」

「たくつ祐一のやつ」

浜島が失神や下着のダンボールが倒れるハプニングはあったが無事に整理が終わった

「ふうゝ終わった」

とみんながくつろいでいると

「みんなありがとね。お礼に私が料理作ってあげる」

「お姉ちゃん、そ・・・」

とメイカは文也の口をふさいだ

「なんだよ？」

「いやなんでもない」

とメイカは文也を連れてキッチンに入ってしまった

「余計なこといたらどうなるかわかってるよね？」

不気味な笑顔で文也に聞いた。

「はい」

「なら戻ってみんなと一緒に待ってて」

文也は凍りついた。

「ふんふん」

と鼻歌歌いながら作っている。

その頃部屋では俺たちが話していた

「メイカちゃんどんな料理なのかな？」

「文也君お姉ちゃんっていつもどんな料理作ってんの？」

「よくカレーライスとかコロツケとか作ってくれます」

「うまい？」

「すげーおいしいですよ」

（僕なんでこんな嘘ついてんだろ？お姉ちゃんの料理・・・）

文也は首を振って

（あゝもう思い出すのはやめておこう）

1時間後料理ができたみたいだ

今日のメニューはカレーライスのようにだ。

とてもいい匂いがする。

浜島も目も覚め、みんな居間に移動して夕食の準備をした。

見た目もかなりおいしそうだ。

「いただきます」

とみんな一口。

「うっ」

みんなの顔色がだんだん悪くなっていく。

「おい！どうやったらこんなまずいもん作れんだ？」

と俺はきいた

「なわけ・・・あるか」

とがっかりするメイカ

「まあでも食えないことはないよな？みんな」

と俺はみんなに同意を求めた。

「うん、そうだね」

「うまくはないけど食べられないことはないぞ」

「そうか？何強がりいつてんだよこんなもん食いもんじゃ」

里奈が慌てて口をふさいだ。そしてみんな完食した。

「すいません、実はお姉ちゃん料理できないんです。なのにみなさん・・・」

と文也は泣き出してしまった。

「向き不向きがあるから」

「もつと練習しろよな」

「メイカちゃんは料理できなくてもかわいいからOK」

「今度はうまくつくれよな。たく死ぬかと思っただぜ」

「そしたらどうやってご飯食べてんだ？」

と浜島がきく

「主に僕が」

「まじで！！！」

みんな驚いた。

「弟に飯を食わせてもらってる姉。かつこわる」

とおれがいうと

「なにいつてんのよ？あんだだつて里奈ちゃんにつくってもらってるじゃない」

「俺は自分で作ろうと思えば作れる」

「ほんと？里奈ちゃん」

「なにいつてんのよ、包丁ももったことないくせに」

と口ゲンカしていると

「おまたせしました」

とまたカレーがでてきた

「お姉ちゃんのを手直ししてきました。あとサラダとかき揚げを作ってみました」

みんな手を付けた

「おいしい」

「うめえ」

「うまい」

「本当にお前ら姉弟なのか。全然違うぞ。まじでうめー」

「うるさいわね。そうに決まってるでしょ」

こうしてメイカの家での整理は終わった。外にはもう灯りが点いていた。

その帰り道

「そういえばさ智明？なんでメイカと文也のケンカをじつとみてたの？ケンカの相手は自分しかいないとおもって嫉妬したとか？」

「嫉妬？何バカいってんだよ！だれがあんなやつ。でも嫉妬かなやつぱ」

「文也に？」

「別の意味でな。俺さ兄弟いるけどさ一番近いお兄ちゃんでも10歳違いだからケンカにもなんねーんだよな。ケンカしてる桜井と文也君見てたら羨ましいなって思ってたな」

俺はこの日初めて年が近い兄弟が欲しいと思った

第4話 体力測定で・・・

地獄の手伝いから5日後この日は体力測定である。

「男子2組、女子はここで着替えてください」

と担任が言うと

「着替え覗かないでよね」

とメイカがいつてきた

「何言つてんだよ、誰が覗くか！！ばかじゃねえの？」

「あら？下着の入ったダンボールを開けようとしたのはどこの誰かな？」

「あれは知らなかっただよ、俺は無罪だ」

「こらそこ！！話さない」

と担任に指摘された。

「先生、塚瀬君にお前の裸見てみた言っていわれました」

「あほか！！言うかそんなこと」

（またでたらめ言いやがってぜってえーぶつ殺すこの女^{アマ}）

確かお前この間手伝ったときメイカちゃんの下着見て興奮して倒れたよな？」

「ばか！！それはお前だろ？」

と浜島がはやし立てる。

「違うんだみんな」

「塚瀬君最低」

「この変態ヤロー」

男女から批難^ゴーゴー。

「うんうん思春期ですねーいい事いい事。でもそういうのは程々にお願ひしますね。はいはいみんな静かにしてください。」

「だから言つてませんって」

と俺は否定した。

そして体力測定の時間

「そういえば塚瀬君って運動神経0だったよね」

「ちげーよ！！ちゃんと人並みにあるわ」

「私の自転車によけられずにオドオドしてぶつかったくせに」

「バカか！！お前は。あんなもん誰もよけられるわけねえくだろ」

「あらどうかしらね？ならいいわよ勝負しようよ。それであなたが勝てば今後一切運動神経ないって言わないから。もし私が勝ったら私のいうことを聞くこと」

「なんでそうなるんだよ。」

「逃げる気？いいよそれでも。そしたら一生私の言う事を聞くことになるけど」

俺は想像してみた

「塚瀬君、ジュース買ってきて」

「えゝなんで？」

「買ってきて」

「はい」

そしてジュースを買ってくると

「おそゝゝゝい！！！」

ととび蹴りを食らう

「塚瀬君、ちよつと来てくんない？」

「なんでだよ」

「いいから来なさい！！」

「はい」

来ると

「ちよつと買いすぎたんだよねだから持って全部」と大量の荷物を持たされる

下手したら

「塚瀬君ご飯食べにつれってよ」

「いやだ」

「つれつてつて」

「はい」

ファミレスに行き

「7800円です」

「全部連れもちでお願いします」

俺はぞつとした

（そうだ！！これは桜井の奴隷生活がかかってるだ。負けるわけにはいかねえ〜んだ）

「わかったよやってやろうじゃねえーか」

俺は勝負を受けてたつた。

「ハハハそれでお前勝負うけたのかよ？お前らしいな」

「うるせーこっちはな人生がかかってんだ」

「人生つて・・・大げさな智明は」

「大げさでもなんでもねえ〜よあんな鬼乳女」

そして勝負の時がやってきた。まずはハンドボール投げからだ。

まず俺からだ

（あいつの奴隷生活なんかごめんだ〜！！）
と投げた。

「37Mです」

「すげー」

「かたつえーんだな？智明」

（まだまだね）

（よし！まず1勝）

「なあ智明？女の子に本気出して大人げねーぞ」

「そうか？祐一」

メイカの番になった

（まあ37Mこすことはねえ〜だろ？）

メイカが投げた

ぐんぐんぐんぐん伸びて行く智明の記録をあっさりと抜いてなお伸

びて行く記録は・・・

（うそだろ？抜かれたよ！！）

「48Mです」

「すごい桜井さん」

「男子の記録抜いちゃったよ」

と女子が盛り上がる

俺のどこに来て

「まず私の1勝ね」

とつぶやいた

「なにいつてんだ？お前油断してただけだこれからだよ。まあ結果は見てるし、少しは華をもたせたほうがいいかな？なんて」

「そうよね？結果は見てるもんね」

不気味な笑顔でいった。その中にすごい威圧感がひしひしと感じてきた。

次は俺の得意な50M走だ

「憲ちゃん？タイムどうだった？」

「6秒7」

「すげー6秒台ジャン」

「祐一はどうなんだよ？」

「聞くなよ俺遅いのしってるくせに・・・10秒2だよ」

俺の番

（さっきは油断して負けたけど今度は俺これ得意だし勝てるだろう）と走った。

俺がダントツで1位だったタイムは・・・

「5秒8です」

「さすが智明だな」

「たしかに足だけは速かったもんね。後はメイカちゃんだね」

メイカの番

（女子が5秒台はまずないだろう？でもあいつなら・・・）

メイカもダントツで1位だったタイムは・・・

計っている人は驚いていた

「よつ4秒6です」

（なにー！ー！！！！4秒台？ありえねえ！さっきのといいあいっホントに人間か？）

反復横とび 智明 5 6

メイカ 1 0 2

持久走 智明 6 分 2 秒

メイカ 5 分 1 3 秒

結局俺はメイカに完敗し俺はメイカの奴隷生活が確定した
体力測定後の着替えの時間メイカがさっそく

「塚瀬？実はさっきナイフ持った人が教室に」

「みんなは？」

「まだ帰ってきてないの。だから今のうちに」

「先生呼べばいいじゃん」

と言うと

「それじゃおそいのもしかしたら誰か来て人質にされるかもしれないのよ」

「だからなんで俺がいかなきゃいけねえんだよ」

「勝負に負けたでしょ？私の言う事きくんじゃなかったっけ？ほらとつとと行く！」

と背中を押され教室に入れられた。すぐにドアが閉まった

「きゃー！！！！」

「えっち」

「見ないで」

「変態」

「これは違うんだ、あのーこれは・・・」

女子全員「問答無用」

「ぎゃー」

女子にボコボコにされた。

その頃メイカは

「のどか沸いた水飲んでこよう」

第5話 ゴールデンウィークに・・・

「なんで2人だけでこんなとこにこないといけないわけ？」

「俺だつていやなんだよ、なんでお前なんだよ？祐一の方がまだよかつたわ」

とメイカと言い争いをしていた。俺たちは今クライスランドに来て
いる。なぜかというと

三日前 昼休み、3・2の教室で

やったー！！みんなクライスランドのチケットが手に入ったぞ
と浜島が言った。

「でかしたぞ祐一」

メイカ「どこそこ？」

とメイカが首をかしげた。

「2週間前にできたばかりで今一番入手困難といわれるチケットな
の」

と説明する里奈

「へーそうなんだ」

と関心するメイカ

「それで、何枚手に入ってたんだ？」

と園田が訊ねる。

浜島「2枚」

園田「2枚か」

里奈「2枚ね」

俺「2枚な」

メイカ「ふーん2枚ね」

「え？2枚！！！」

みんな驚いた。

「ふざけんなよみんないけねーじゃねーかよ」

「こら！わがままいわないの智明」

里奈に叱られた。

「俺さちよつと法事でいけないんだよ。だからみんなでどうにかしていつてくんない？」

「やさしいのね浜島君、大好き」

とメイカが猫なで声でいうと

「そう？みんな聞いた、メイカちゃんが大好きだつて？」
はしゃぐ浜島。

「あいつ絶対いつか女に騙されるぞ、あれじゃ」

園田がそう言うのと俺と里奈は納得したと同時に俺は

（あいつ今まで何人の男を騙してきたんだろう？）
と思つて怖くなった。

そして俺たち4人はまずじゃんけんで決めることになり俺は抜けるはずだったがみんなの意向で強制的に俺もすることになった。

「じゃんけんぽん」

メイカ パー 他グー

1人決まった。

残るイスはあと1つじゃんけんの行方は・・・

（どうでもいいや、まあ勝ったらラッキーということぞ）

（絶対行きたい、だって入手困難のチケットよ、またいつ手に入るかわからないのよ）

（冗談じゃねえ〜あいつなんかと行きたくねえ〜よ！！すぐ負けよう）

「じゃんけんぽん」

俺 グー 園田 グー 里奈 チヨキ

（よっしゃー！！あと1勝）

（うそ〜まじで勝っちゃったよ）

（あゝあ負けちゃった、いつになるかわかんないけど今度までおあずけね）

残るは2人 園田憲太郎 14歳 6月21生まれ O型龍聖中学校
校NO1のイケメン

そして俺 塚瀬智明 14歳 7月21日生まれ A型ごく普通の中学生

(こうなったら絶対勝ってやる)

(負けてやる、ゼッテー負けてやる)

「じゃんけんぽん」

俺 チョキ 園田 パー

(やべー勝っちまったよっ)

俺はがっかりした。

(あゝあ負けちゃった)

「なあ里奈本当はいきたいんだろ？これ譲るよ」

「いいの？ありがとんでも私この日おそらくお父さんが入院するから無理なの」

(なに見え透いた嘘言ってんだよ)

「そうですか」

「憲ちゃんお願いだよもらってくんない？」

「俺は知らん。自分でなんとかしろ」

「けんちゃん？」

「どこいく？」

と俺が聞くと

「あれ」

と指をさした所は

「きゃーきゃーきゃー」

(まじかよ！！！おれ・・・)

「うわゝ死ぬゝ」

「ハハハ、たのしゝ」

「はーはーはー、楽しかった。情けないわよ、これくらいで怖がつて」

「ぜーぜーぜー。ふざけんな、怖いもんは怖いんだよ」

「お前怖いものとかねーのかよ」

「そんなのあるわけないでしょ？」

ときっぱり言うメイカ。

「次どこいく？」

とメイカが聞いてきた

「あれなんかどうだ」

と俺が指をさすとメイカが身震いをした

「お前もしかして怖いのか？」

「何言つてのよ怖いわけないでしょ」

と言うメイカ。

「ちよつと先に行かないでよ。」

さっきまでの勢いはどこえやら怖がるメイカ。

「やつぱこえゝのか」

とからかうと

「何言つてのよ！こんなん全然怖くないわよ」

と強がった。すると横から落ち武者のようなお化けがでてきて矢を放った。

「きゃゝ！！！」

と俺の袖を掴んで俺を見た。彼女は涙目だった。

（やべゝかわいいじゃん。）

と一瞬その顔に見とれた。そして俺たちはお化け屋敷から出た。

「ハハハなんだよあんなんで怖がつてなさけねゝぞ。」

「別に怖がつてなんかないわよ！！」

「じゃゝなんで俺の袖を掴んだのかな？」

「それは・・・」

と口ごもるメイカ

「認めろつて」

「だから怖くなかったって言ってるでしょ？」

「あゝそうですか。たく素直じゃネエゝんだから」

「それってどういう意味よ？私はいつも素直ですよ」

「どこがだよ！！それで今度はどこいく？」

「あれなんだろう？」

と俺が指差したのは - 40 の体験部屋だった。そこは簡単な迷路ですべて氷でできていた。また途中においてある氷の中にはぬいぐるみやカードや果物が入っていて、それを当てたら景品をもらえると言っものだった。

「行ってみよう」

と強引にメイカに手を引かれて入った

「寒っ！！」

「だれよ！！こんなところ入ろうって言ったの」

「おまえだろ！！」

「もとはといえばあんたが見つけたんでしょ？」

「なにいつてんだよ強引に連れて行ったのはお前だろ？」

「なによ」

「なんだよ」

といつものようにケンカしてると従業員に

「おいその兄ちゃん姉ちゃん夫婦ゲンカもいいけど後ろ悶えてるんだけど」

注意された。

「すいません」

と俺たちは無事にゴールした。

そして

「お腹すいたから何か食べに行こうよ？」

とメイカが言った時時計の針は1時を指していた。

「そうだな」

（よしとりあえずは持ったな）

「そうだ！！私、弁当作ってきたんだっけ？」

「それ・・・だれが作ったんだ？」

と聞くと

「私に決まってるじゃない。」

俺たちはなにもやっていないヒーローショーの観客席で食べることにした

「ほら、どうぞ」

と皿によそうメイカ

（こいつの料理見た目はいいんだけど）

（そうよ、あれからたくさん練習したんだから、まずははずがない）俺は覚悟を決めて口に運んだ

「まずい・・・俺を殺す気か」

悶絶した。

「そんなはず」

とメイカも口に運ぶ

「うっ」

悶絶した。そして申し訳なさそうなさびしげな顔をしていた。

それに見かねた俺は

「わかったよ。全部食べてやるよ、がんばって作ったんだろ？」

と言うとメイカはとても嬉しそうな顔をした。

（やっぱまじでかわいい）

と胸がキュンとした。

「私、実はこうやって男の子と遊ぶの初めてなんだ」

「そうなんだ、なんか意外。」

「私いつも学校ではあんな風にしてるでしょ？だからみんな男を何人も騙してると思われてて」

（やっぱ、みんなああいうこと言いながらちゃんと見てんだな）

「それで？人がどう思おうとそれはお前に関係ないだろ？」

「でも」

「いいじゃんお前はお前だろ？つつかなにいつてんだよ？お前らし

くねー頭おかしくなったんじゃねえのか？」

「ごめんなんかおかしいこといつちやっただね」

（なんだ？こいつ）

（なに言っただろう私・・・）

そして食べ終わってまたいろいろまわりいつの間にか陽は傾きかけていた

「そうだみんなにお土産買わないと殺されっちまう。」

二人でお土産売り場に向かった。

「あいつはこれ」

「里奈はこのＴシャツ」

「憲ちゃんはこの香水かな？」

と選んでいると

「これ買って？」

とせがんできた

「だめだ」

「いいじゃん」

「だめ」

「いいじゃないキーホルダーぐらい」

「だめなもんはだめ」

「けち！！」

「あゝどうせ俺はけちですよ」だ」

「まゝあきらめるんだな」

「いいでしょ？買ってよネエ買って！！」

とものすごい威圧感で迫ってきた

「わかったよ、買ってやるよ」

「合計で6800円です」

そして帰り道

「なんだよキーホルダーねだりやがって、あれが無ければ予算内だったんだぞ」

「いいジャン別に」

「2000円もしたんだぞ2000円も、大事にしるよな」
「瞬俺はクラッと来た」

（やべーやっぱ俺無理しすぎたかな？）

「さあ〜ね」

「塚瀬君？」

「なに？」

「大丈夫？」

「なにが？」

「さっきからフラフラして歩いてるし、なんか顔色悪いよ」

「あ〜大丈夫、大丈夫疲れてるだけだから」

と気の無い声で俺はメイカに倒れこんだ

第6話 メイカの家で・・・

「塚瀬君？」

「なに？」

「大丈夫？」

「なにが？」

「さっきからフラフラして歩いてるし、なんか顔色悪いよ」

「あゝ大丈夫、大丈夫疲れてるだけだから」

と気の無い声で俺はメイカに倒れこんだ

「ちよつと！！なにすんのよ！！」

「あ！ごめん」

とメイカから離れる。

「ホント大丈夫？」

「ああ、こんくらいだいじょう・・・」

とまた倒れた。

「たくつ無理しちゃって」

メイカはあろうことかなんと俺をおぶった。

「いいつて、別にちゃんと歩けるから」

「ばかじゃないの？そんな体で」

「すまねえゝな」

「勘違いしないでよ？この前かりを返すだけなんだから」

「はいはい」

（そうよこれはかり返すだけなんだから）

そこからは俺は記憶はなかった。

「ただいま、お母さん？、氷枕と水とタオル」

「お母さんならいないよ、出張」

「なら文也でいいや、持ってきて」

「なんで、お姉ちゃんなにかあったの？」

「いや私じゃなくてこっちにね」

「あ！智明さんじゃん、家に帰せばいいのに」

「駅からは私の家のほうが近いでしょ？」

「つつか病院いけよ」

「この時間じゃどこも空いてないでしょ。それに里奈ちゃんに教えてもらった総合病院も遠いし」

「わかったよ、持ってくる」

と文也

目が覚めたら見覚えあるような無いような部屋にいた

「ここは？ゴホッゴホッ」

「私の部屋よ、目が覚めたみたいね」

「大丈夫？まだ顔が真っ青だけど、今夜休んでいけば？」

「大丈夫、なら俺もう帰るな、わりいゝなんか迷惑かけたみたいで」とベッドから出る俺。しかし頭がボーっとして平衡感覚を保てない。倒れようとする俺を受け止めた。

「今日はこれ以上無理しちゃだめ。休んでいって」

「NOだ。お前の部屋じゃ直るもんも直らネエ」はあはあ

とまた立ち上がりメイカを振り切り出ていこうとする俺。しかしまた意識を失った。

「そんな体で一人前に文句いつて。ちゃんと元気になりなさいよ？じゃないと私が困るんだから」

そして翌朝目が覚めると

「具合どうですか？」

そこには文也がいた。

「あれ？お姉さんは？」

「お姉ちゃんはさっきまで起きてましたけど、疲れちゃったみたいで・・・」

下を見てみるとメイカが気持ちよさそうに寝ていた。

（ありがとな桜井）

「はいこれおかゆです。」

「ありがとう、ちなみにこれは・・・」

「心配しないでください僕が作りました」

「いただきます」

と一口。

「うめ」

食べ終え

「さーてもうでるか？なんかごめんな迷惑かけた上に食べさせてもらって」

「いいですよぜんぜん」

「こつちこそこんなバカ姉貴に付き合ってもらって、実はお姉ちゃんこつちに来てからいつも智明さんのことばかり言っんですよ。」

『運動神経0のためだめ男』とか『下着を見ようとする変態男』とか。

「あいつ!!」

「行くことが決まったときも『なんであいつと遊園地いかなきゃなんないわけ？』って愚痴ってました。でもなぜかな？あんなこと言ってるのに僕にはかなり嬉しそうに見えました。僕にはお姉ちゃんのような顔久しぶりに見ました。ほんとありがとうございます」

「そんな言われることしてないって。」

「帰るわまじで」

部屋を出て行くときに

「ちよつとまってく・・・」

しかし俺は聞かずに出て行った

「あゝあ行っちゃった・・・」

玄関で靴を履いてるとガチャガチャと鍵を開ける音がする。

「あぶないわね、鍵開いてる」

俺は視線を感じて見上げてみるときれいな女の人・・・

「どうも」

と愛想笑い。

「きゃ〜〜男〜!!!!!!」

と驚かれた

「うゝんうるさいわね」

その声を聞いて目覚めたメイカは玄関に向かった

「あゝ、塚瀬くんだなんでここに居るわけ？」

どうやら寝ぼけているようだ

「メイカどういうことこれは？」

と言うとメイカは

「お母さん!!」

と一気に目を覚ました。

（え？これが母親？）

（これはヤバイ!!なにを言っても信じてくれないよ・・・）

「これは・・・」

固まるメイカ。

（えゝ？なんでそこでとまんだよ？めっちゃめっちゃ誤解されんじゃねえかよ!!）

「両親がいないからって男連れ込んであんたってやつは!!」

「これは違うんです、メイカさんと遊んで僕がたおれちゃってそれでこの家に運んでもらったです」

必死に弁解する俺。

「君名前は？」

メイカの母は俺を睨み迫ってきて

「塚瀬智明です」

と答えた。

すると怖い顔が一転

「あなたが？いつもメイカからきいてるわよ」

とあっさりとした言い方だった。

「それにしてもかわいい子ね、食べちゃいたいくらい」と母親は抱きしめた

「うゝっ苦しいっ。」

「お母さん？」

とメイカは俺と母親を離した。

「なにするんですか?!?!」

すると文也が出てきて

「また始まった・・・」

「お母さん男の子をみるとこうなるんですよ。母性本能くすぐるみたいで」

「なんで? 文也君がいるじゃないか」

「僕もされるんですよ」

(年下好きなのか? この人)

「もう帰る? 智明ちゃん」

(智明ちゃんって・・・)

「ええ帰りますけど。あのくすいません・・・その呼び方やめたもらえませんか?」

「それならケーキ買ってきたんだけど良かったら食べていけない?」

「いや遠慮しときます」

「気にしないで智明ちゃん」

とメイカの母は強引に俺を中に入れた

「ちよつとお母さん。塚瀬くん迷惑してるでしょ?」

と引き止めるメイカ

「いいじゃんいいじゃん。メイカの彼氏なんでしょ?」

「そんなんじゃないって」

とメイカは慌てて否定した。

「なにあかくなつてのよ。かわいい」

(わかりやすいんだから)

ということではリビングに連れて行かれた。

俺はこの状況を笑うしかなかった。

「ごめんね? お母さんたら」

「いいって別に。兄貴のことがあったからこれでチャラだな。」

そしてケーキがでてきた

「智明ちゃんどれがいい？」

「だからその呼び方やめてくださいって」

「これでいいです」

「メイカは？」

「べつにどれでも」

メイカは俺と同じものを食べることになった

「あゝ私のよりも大きい交換してよ」

とメイカは俺に言ってきた

「そんなわけねえだろ。同じ大きさだろ？」

「いや、微妙にそっちが大きい」

「いや同じ大きさだ」

「そっち大きい」

するとメイカの母は笑顔でメイカを殴った

「お客さんにそんなこといわないの」

とニコヤカ二言った。

（殴ったよ・・・しかもグーで。）

俺は耳元で

「ざまあみろ」

と言うと

メイカの顔が赤くなった

「なによ！！！！」

とかかってきた

「どうしたの智明ちゃん？」

「なんかメイカさんが訳も無く飛び掛ってくるんで困ってるんですよ」

「コラ！メイカもう中学生でしょ？そんなことしないの」
と叱られた

「ごめんね？あやまりなさいメイカ！！」

「いやよ」

「メイカ！！！！」

「ごめんなさい」

（仲のいいこと）

そしてケーキを食べ終えメイカと文也に送ってもらった

「ほんとすまなかったな、なんかごちそうまでなっちゃって」

「勘違いしないで踏み切りの借りを返したただけだからね。」

「はいはいそうでしたね」

「ほんととはあのまま放ってくつもりだったんだからね」

「ホントは心配だったくせに」

「クソガキは黙っとく」

と文也をグリグリした。

「あれ？昨日一晩中つきつきりで看病したのはだれだった？」

「下の名前をしきりにいって手を握り締めたのは？」

顔が赤くなっていくメイカ。

「寝てる間に智明さんにき」

メイカは文也の口をふさいだ

（うそ！！あいつ見てたの？どうしよう）

俺が寝てる時

「ぐっすり寝てる」

と俺の寝顔をみてメイカの顔は赤くなった。

（ここは私の部屋、いるのは私と智明2人だけ。ヤバイなんか緊張してきた）

（誰もいないよね）

と俺の顔にメイカが顔を近づけた

ぎーとドアの音

「わたしなにやってたんだろう、なんであいつなんかに・・・」

「文也あれ見ちゃったの？」

「偶然通ったらドアが開いてて見えたんだよ」

「なんのことだ？」

「うーんなんでもないの」

「実は・・・」

と俺の耳元で話す文也。

「うそ！！まじで！！」

「お前おかゆにチヨコレートいれようとしてたんだって？やめろよ
な殺人料理」

それを聞いたメイカは胸をなでおろす

「なにが殺人料理よ」

「だってそうだろ？あんなん食いもんじゃねえもん」

「なんですって？！！！！」

「なんだよ？！！！！」

（元気になってよかった）

第7話 兄の・・・（前書き）

今回は視点を变えてお兄さんのお話です。

第7話 兄の・・・

僕の名前は塚瀬翔太25歳。普通のサラリーマンです。

家族は姉と弟の3人暮らし。両親はいません。母は僕が中学に上がってすぐに、父は中学3年の時に亡くしました。祖母と祖父の援助もあり、有名国立大を卒業しました。そして一流企業に就職。趣味は野球。自分で言うのもなんだがプロのスカウトに注目されているようです。自分ではなんで自分なにかと思っています。ということとでそんな僕のとある一日です。

AM 7:00

「朝だぞ〜起きんか〜コラ!!!」

という目覚ましで起きます。ちなみにこの声はラッセル神山というプロレスラーです。

AM 7:15

まだ完全に開ききらないまぶたをこすり洗面所で顔を洗い、歯を磨きます。

顔を洗うときはまず3回水で洗いますそれから洗顔フォームをつけて3分間洗います

そして洗い落としそれからまた10回洗います。歯を磨くときは歯ブラシの4分の3は磨き粉つけてそれぞれ10回ずつ磨きます。それで目が覚めます。

AM 7:25

着替えも済ませ朝食の時間です

「翔太さん、はい」

朝食は弟の幼なじみである里奈ちゃんが作ってくれます。彼女の料理は絶品です!!

こんな彼女を持つ弟をうらやましいと思います。ちなみに今日は豆腐とわかめの味噌汁、卵焼き、めざしにゆで野菜、ごはん、味付け

のりです。

「今日もおいしいね、里奈ちゃん」

と僕が言うつと

「そんなこと言ってもなんにもでませんよ」

と言う里奈ちゃんがニコツと微笑む。毎朝彼女の笑顔でその日1日のエネルギーをもらって、家をでます。

AM 7:40

駅のホームで電車を待ちます。

「おはよう塚瀬くん、昨日の試合どうだった？」

「おはようございます、先輩」

と話しかけてきた女性は福田陽子さん。僕の上司であり、憧れの人です。

昨日の試合というのは、僕の会社の近隣と会社5つで土日・祝日にリーグ戦をしているのです。その5社の中には去年都市別対抗戦で優勝したフィナークスやおとしプロ野球で21年ぶりに三冠王になった上松弘毅を輩出した全日鉄などがあります。うちの会社という弱小チームで万年最下位だったのですが、今年は最下位どころか優勝争いをしています。

専門家いわく僕がレギュラーになったことでちゃんと攻守の要がしつかりしたとのこと。確かに前よりはエラーは減ったけど……。ちなみに僕は4番でキャッチャーです。

「なんとか勝ちましたけど」

昨日は首位攻防戦で勝てば首位になれるという試合だったんです。2-1で負けていたのですが、9回裏に僕が逆転3ランホームラン打ってサヨナラ勝ち。

「よかった〜途中までみてただけだけど急に仕事はいちゃって。そう勝ったんだ？」

そんな喜ぶ先輩を見て顔を赤くする僕。そうなんです。僕は先輩のことが好きなんです。

なのですが・・・彼女は気づいてないよう。

A M 8:20

先輩と話しつつ、電車に揺られて40分、会社のタイムカードを通します

「おはようございます」

「また先輩と一緒に来たんだ、ここ最近ずっと一緒にきてるよね？ 狙ってるの？」

「違いますよ。電車に乗る時間が偶然一緒なだけで・・・そっちこそ下山さんと一緒にきてるじゃないですか」

「あいつが無理やりしかたなく・・・」

この人は僕の同僚の神崎雅哉。下山さんとは下山麗香。この2人は高校からの付き合いです。

「昨日の試合見たよ、すごかったね、あのホームラン。見逃せば完全ボールだったのに」

昨日の試合の9回裏2死2・3塁の場面相手が思い切って低めのボール球投げてきたんです。球種は相手のウィニングショットである内角低めのスライダー。

「ありがとうございます、あれは体が自然に反応したんですよ。偶然です偶然」

この人は僕の所属部署の部長です。部長は2年前奥さんに子供を残し逃げられ、部長が1人で子育てをしているそうです。

A M 8:50

仕事開始です。僕の部署は営業部。さっそく外回りです。いま力をいれてる新商品を持って陽子先輩と一緒に

「ぜひ、わが社の新商品を！！！」

「新商品にはちよつと・・・」

「売れてから来てくれ」

「信用できん」

と一流企業とはいえ現実には厳しいもの。

「ここもだめだった・・・」

「弱音をはかない、次がある」

と笑顔で励ます先輩。いつも前向きな先輩。そんな先輩だからこそ・

P M 12:30

午前の外回りを終え、先輩と2人で定食屋で昼食をとります

「あゝつかれた」

「でも久しぶりにお昼に昼食とれるじゃないですか」

「それはそうだけど」

先輩はいつも粘る。長い時には3時間。そうやって顧客を増やしていくのです。

そのせいでほとんど昼食の時間帯がずれるのです。

「雅哉くんあゝんして？」

「やめろって恥ずかしいから」

といつもアツアツぶりを見せ付けられます。

「あらら！アツアツぶりを見せ付けちゃって」

と先輩がからかうと雅哉くんが否定しました

「先輩そんなじゃないですって」

「なに言ってるのよ、照れちゃって。雅哉くんったら」

と麗香ちゃんは腕を組みました。

「照れてない、照れてない、てか離れろ」

高校のときから麗香ちゃんは雅哉くんへべつたりでした。なにをするにも一緒だったのを覚えています。彼女たちは中学からの仲でその当時からこんな感じだったんだそうです。

そんな彼女に嫌がる態度を見せるも実はまんざらでもない様子。

「私達も腕組もつか？」

と言っ先輩。

（え？）

戸惑う僕。

そして僕と先輩は腕をくんだ。

（僕今、幸せ、せっせせ先輩とうでくnderる）

だんだん顔が赤くなつていく。

「塚瀬くん、塚瀬くん」

そしてすぐに正氣に戻った

「たく塚瀬くんってば、腕組んだだけでかおあくなっちゃって」

「すいません」

「まあそれがアンタのいいところでもあるんだけどね」

P M 1 : 4 0

仕事再開。また外回りです

「よろしく願います」

「この商品をどうか」

「ぜひ、この商品を」

「だめ、だめ」

「ぜひいただきたい」

「前向きに検討してみます」

と粘りの交渉は延々と続き気づいてみると夜8時でした。

「ごめんね、また遅くなっちゃったね」

「いいですよ、今日は練習もなかったし、本当に先輩と働ける夢のようですよ」

「ありがとうございます」

（ほんと夢のようだ、いつも先輩のそばにいられるなんて）

P M 8 : 0 0

仕事も終わり、いったん会社に帰ります。そして練習も休みのため先輩たちと4人で

飲みに行くことになりました。近くの居酒屋に入りました。でも僕、お酒は好きなんですが弱いんです

しかも酔いだすと

「麗香ちゃんおっぱい小さいね」とか

「麗香ちゃん雅哉とどのくらいのペースでやってんのかしまいには

「先輩と麗香ちゃんどっちがおっぱい大きいでしょう?」と触りだす始末。もちろん記憶はありません。

先輩も先輩で

「神崎!! 実際下山のことどうおもってんのよ?」

「好きなんでしょ? 好きっていいなさいよ意気地なし」と酔って暴走しだす。これもまたいつものこと。

そして先輩と何件かはしごして姉さんとでくわしました。

「翔太、また酔ったな」

「なにが悪い!!」

「そうだそうだ」

先輩も同意しました。

「陽子ちゃんまで・・・」

次の店で

「僕は先輩が好きだ~~~~!!!!」

と叫びました

「そうかい、そうかい、私も好きだよ。あんたのこと」

「それじゃ」

「はい今日はここまで」

と姉さんは先輩を家まで送り、ベッドに寝かせました。

そして僕達は自宅に戻りました。すると弟の友人たちが来ているようでした。

気づいたら翌朝でした

「イタタタ、頭痛い・・・吐き気がする」

どうやら二日酔いになったみたいです。

そして居酒屋の後の話をきいて自己嫌悪に陥ります。

その中で先輩への想いを酔った勢いで叫んだそうで今度は自分の力で一発・・・

第8話 テスト勉強で・・・

6月の終わり、梅雨の真っ只中。

「ねえ、荒木さん、ちよつとノート見せてくれないかな？」

「うー」

とおびえるように去っていった。

「おお！塚瀬新しいの入ったぜ、ホラやるよ」

とクラスメートの真木に渡されたのはエロ本だった。

「おい！こんなんいらねえよ！！真木」

と叫ぶがどこかへいつてしまった。体力測定的一件以来、女子には避けられ、男子にはエロ本やエロDVDを大量に貰うようになった。

しかもそれ以来奴隷生活を強いられる始末・・・

「あゝまたもつてきてる。エロ本いやらしい」

とわざと大きな声でメイカが言った。

「おい？大きな声言うなよ」

と耳元で囁いた

「だって事実でしょ？」

「これは男子達が勝手に持ってきてるだけだ。断じて俺のものではない！！」

「でもいま塚瀬くん持ってるのはなに？」

「これはあいつらが勝手におれに渡してくるだけで」

「聞いた？みんな、男子たちから奪ってるんだって」

「そう言ってないだろ？」

（くそ！！またこの女^{アタマ}）

「まあ塚瀬君だから仕方ないか」

「そうよね」

と女子は納得した。

「そこで納得すんな」

「塚瀬くん？完全に変態っていうレッテル貼られたね」

とメイカはニコニコしながら言った

「だれのせいだよ、だれの」

俺は拳を握り怒りを抑えて言った。

「でさテスト勉強進んでる？」

「まだあんまりやってないけど。珍しいな桜井。そんな話するなんて、もしかして自信ないのか？」

「そんなわけないでしょ？」

（実際あんまり勉強してないからヤバイんだよね）

「そうだ、みんなでテスト勉強しよう。テストまであと1週間だし、そろそろ本格的にしないと」

というわけで里奈や園田たちにも話しうちでテスト勉強することになった。

「ここ分ないんだけど？教えて」

メイカに見せられたのは英語の問題だった。

「いやだね、なんでおまえなんかに教えないといけねえんだよ」

「教えなさいよ」

「やだ」

「教えてください」

「絶対やだ！！」

「へーこの間恩忘れたつもり？それに勝負に負けたでしょ？」

（また出たよ・・・反論したいんだけど。いつものようになるからここは）

「この間？なんのことだ？」

とぼけてみる

（完全に忘れてる・・・）

「この間ってクライスランドのことか？」

「へーなんかあったんだ」

「あったね。これは智明聞いてあげるよ。」

「なんもないから、期待するような目で見ないでくれ」
それでもみんなの熱い視線を感じた。

「とぼける気？」

「別に。とぼけてなんかねえよ。なんのことだよ？」

（また始まった・・・）

「別にそれでもいいわよ。私にいきなり倒れこんできたのは誰？」

「あれはほとんど歩けなかったんだからしかたねえよ」

「女の子におぶらせたのは？しかも重かったし」

「あれはお前が勝手におぶったんだろ？」

「なんかさりげなく誘導尋問されてる感じじゃない？」

「そうだね・・・」

「私の家に泊まったのは？」

「知らねえーよ。気づいたらお前んちだったんだから。」

「しかも、母親に誤解されるし。そんな関係じゃないのに」

「それはお前の態度の問題だろ？俺には関係ないじゃん」

「もとはといえばあんたがウチにきたからでしょ？」

「誰が連れてきたんだよ！誰が。俺1度気がついたとき帰ろうとしただろ」

ケンカはヒートアップしていく。

「やれ、やれ、もっとやれ」

と浜島はヤジを飛ばす

「お前は黙ってる」

「あなたはひっこんでて」

と2人は浜島を

「まあまあここで止めとけて」

「はいはいここまで」

「離せよ憲ちゃん」

「離しなさいよ」

と里奈と園田が止めに入った。

「は」

里奈と園田同時にため息。

「たく2人とも子供なんだから」

「いいじゃん2人とも楽しそうで」

「そうだけどさ。こう顔見るたびケンカして。少しは止める立場も考えてほしいよ」

「確かに・・・」

「まあ見守っていきましょうか。あいつらを。この先どうなるかわからないけど」

結局勉強を教えることになった。

「こんなんもわかんねえのか？お前それでも受験生か？」

「これは、こう使うから、だからそうなる。」

（こいつ、意外とやるじゃん）

「わかんない、もうちょっとわかりやすく」

「え」

（こいつどれだけレベル下げておしえないといけねえんだ）
と考えているとある名案が思いついた

「里奈？こいつの英語みてやってくんないかな？俺限界」

「いいけど、私下手だよ？」

「いいよ別に」

「どれどれ、あゝ智明がいつてたのはこの用法のこと。こういうときこの意味になるんだ。だからこうなんの」

「あゝね！！里奈ちゃんわかりやすい！！誰かさんと違って」
とこつちに鋭い視線がむいた。

「わるかったな。わかりにくくて」

「なに勘違いしてんの？だれもあんたなんて言っただけじゃん」

「ならなんでこつち向くんだよ。」

「偶然よ、偶然。」

（このアマ。殺す、殺す、ぜってえ呪い殺してやる。）

「今度は数学なんだけど？」

「数学ならここにスペシャリストがいるよ。いつも数学だけはいつも満点捕る人が」

「誰？誰？」

「浜島祐一くんです」

「ほんと？教えて教えて」

「メイカちゃんに教えるなんて夢見てるようだ。」

（もついいから一生夢見てろ）

「でどこがわかんないの？」

「ここなんだけど」

「あゝ。ここか。このグラフはxが0のときyが2になるんだよね。まずそこに点かいてみよう。」

「こう？」

「そうそう」

と浜島は異様にハイテンションである。

「それから？」

「後は簡単＋はxが1つ増えるたび2つ上にいく。はその逆。x

が1つ減るたびに2つに下にいく、この場合はね」

「なんで」

「とにかくxについてる数とその後の数字分動かすの。この場合は
 $y = 2x + 2$ だからこうなるの」

「わかった？」

「うん、なんとなく・・・」

と不安を残すいいかただったが

「次は・・・こうでしょ？」

浜島に見せてみる。

「そうそう」

どうやら正解らしい。その後3問連続正解した。

「すごい、すごい！！メイカちゃん飲み込み速いね？」

「教え方がいからだよ」

「みんな聞いた？教え方がいからだって？」

いつものように浜島は調子に乗っていた。

「ほっとこほっとこ」

と俺たちは浜島を無視してそれぞれの勉強を進めた。

「今日は理科」

「理科なら憲ちゃんだね」

「どれ？これか！これは・・・」

と園田が教えた。

「うんうん」

「わかったよ。すごいみんな。なんでそんなに教え方が上手なの？
一人を除いて」

とメイカは俺を見て言った。

「わるゝございましたね。教え方が下手で」

「だってホントのことじゃん、教え方下手なのは」

「口をはさむようだけどさメイカちゃん？智は英語に関してはホント
わかりやすいよ」

（わかってるわよそんなこと）

こうしてみんなそれぞれ勉強して1週間が過ぎテストの日をむかえた。

第9話 期末テストで・・・

「塚瀬くん？もし今回のテストで私に勝ったら私の言いなりの生活から開放してあげる」

（どうしたんだ？いきなり。もしかしてこの1週間で勉強できたと勘違いしてんだな）

（なにはともあれあいつの奴隷生活から開放されるんだ。いろいろひどいことされたもんな）

とやられたことを思い出してみる。

まずは、女子の着替えてる教室に入れられただろそれから自分の宿題をやらせたり

いきなり朝早く呼び出し食らって1日中荷物持ちさせられたりもしたこの1カ月半、あいつのパシリになっていた。

テストは始まった。今日は英語と社会だ。どちらも俺の得意教科である。

（よし、これで点数稼ぐぞ）

俺たちの学校のテストは50点満点である。それでいつも英語と社会は8割以上つまり40点以上とっている教科だ。

1時間目は国語である

（あゝこれはこれでこの問題はどっちだったかな？・・・）

（あぶねゝ名前書いてなかった！！）

（これはこれだから、これはイ、これは・・・）

ふと俺は周りを見てみた。すると1人名前書いてない答案を見つけた。見上げてみるとメイカだった。

（こいつ、名前書いてねえじゃん）

それに気づいてメイカはこっちを向く。

（なにこっちみてんのよ？もしかしてカンニング？）

俺たちはにらみ合った。それに気づいた先生が

「こらそこ、なにやってんだ」

と注意される。

「先生、塚瀬くんがカンニングしたんです。」

というメイカ。

「やってない、やってない。やってないですよ、先生」

「だって私の答案見て鼻笑いしたじゃない」

「そんなことしてねえし。また、なんでいつもでたらめなこというんだよ」

「でたらめじゃないわよ！確かに見たんじゃない。」

「見てない！！」

「見た！！」

「見てない！！」

「見た！！」

いつものようにケンカしていた俺たちに先生はしびれを切らし

「あくもうつるさくいい！！どっちでもいい！！今はテスト中だく！！」

と怒鳴られ、俺たちは廊下に立たされた。

「どうしてこうなるのよ」

とメイカが不満げにいった。

「当たり前だろ？テスト中にあんだけ言い争いすれば」

「あんたがいけないんだからね。」

「何でだよ！もとはといえはお前が悪いんだろ。言いがかりつけるから」

「なに言ってるのよ。もともとあんたが答案見るからでしょ？」

「お前の勘違い。あれは周りを見回しただけ。お前の答案見てもねえし、鼻で笑ってもねえ」

「どうかしらね」

「だいたいな、お前の答案見たってなんの得もねえんだよ」

「それどういう意味よ」

「お前の頭に聞いてみる」

「なんですって?」

「なんだよ」

「こらゝお前らうるさい。外でしろ」
とまた怒られた。

1時間目が終わり休み時間

「いつもあの2人ケンカしてるよね、できてるんじゃない?」

とクラスメートがはなしていた。それを聞いたメイカは

「これどういふことよ」

と俺は胸ぐらをつかまれた。

「おまえがそうするからだろ?」

「あんたいつも私が気の触れることするからでしょ?」

「いつそんなことしたよ?お前が勝手につかかってんくるだけだろ?」

きーんこーんかーんこーんと2時間目の始まりのチャイムがなった。

「結局次のテスト勉強できなかったじゃネーかよ」

「あれゝ次英語でしょ?得意科目じゃなかったっけ?」

「そうだけど。一応確認したいところがあったの」

「へゝ自信ないんだ?」

「なわけねーだろ!」

「はい!テスト配るんでしゃべらないでください」

と英語のテストがはじまった。

俺はすらすらと答案用紙を埋めていく

(楽勝!!今回も40点は堅いな)

一方メイカは

(これなんだっけ?あゝこうだ。あつと智明に教えてもらったところだ。らっきー)

と少しは詰まりながらも順調にいつているようだ。

きーんこーんかーんこーん

「はい!そこまで後ろから集めてきてください。」

「きょうはこれで終わりです。昼に終わったからって遊びほつけない

いように。明日もテストがあるんですから。」

「今日どうだった？」

と帰り道5人で話していた。

里奈「英語のあの問題わかった？」

俺「あれはあれだろ？」

園田「あそつか！そうだったのか。わからなかったよ」

浜島「そうなの？俺こうしたんだけど？」

俺「あゝそれまちがってる。それはテストが終わってから詳しくな」

メイカ「全然わからなかった。英語。教え方がいい人ばかりの中1人だけ悪い人がいたわね。きつとそのせいだわ。」

「なんだと？」

「そこでこらえる！智」

「メイカもメイカいつも智明のことになるとこうなんだから」

そして里奈は耳元で

「たまには優しくしないと嫌われるよ。智明に」

メイカは顔を赤くして

「なんでそういうことというのよ。里奈ちゃん！！なんでもないんだからね。」

必死に否定した。

「ならなんで顔赤くなってんのかな？教えてよ」

「それは・・・」

と口ごもるメイカ。

「それは？」

追い討ちをかけるように聞き返す里奈。

「暑いからよ。暑いから」

「そうなんだ？」

（あゝあごまかされちゃったな）

「なに耳打ちしてんだよ里奈？それに桜井顔赤くなってるし」

「なんでもないよ」

「そつか」

（変だ。なにをふきこんだんだ？里奈は）

と俺たちはそれぞれに家に帰った。

俺は家で

「これわかんねえや。お兄ちゃんが帰ってきたら教えてもらおう。
あいつちゃんと勉強してっかな」

ふと俺はそう思った。

「なにいつてんだろ？おれあいつがテストが悪くても関係ねえのに・
・・」

ガラガラガラとドアが開く音がした。出てみると里奈だった

「智明？昼、まだでしょ？」

「うん」

と昼食の冷やしそうめんを食べていた。

「勉強進んでる？」

「まあぼちぼちね。明日はなんだっけ？」

「明日は・・・なんだったっけ？」

「もしかしてメモってないとか？」

「うん」

「なんだよ、それ！テストの時間割ぐらいメモツとけよ」

「待ってて今時間割もって来るから」

と俺はカバンをあさり、テストの時間割をコピーして里奈に渡した。
片付けも終え、里奈は帰り俺はまた勉強を始めた。

そして2日目

「はいそれではテストを行いますので、教科書やノートはカバンに
しまつて、教室の前か後ろにおいてください」

1時間目は数学である。

（やべえ！全然わかんねー。一夜漬けはやっぱきつかったな・・・）
（どうしょ・・・全くやってなかったもんな・・・これは負けた
な・・・）

とどっちもふるわなかった
きーんこーんかーんこーん

「どうした？ 智明、メイカちゃん死んでるぞ」

「聞くな」

「聞かないで」

俺とメイカは魂がぬけたように歩いた

2 時間目は理科

（よし、あ、これはいい、これは・・・だから）

俺は順調に問題を解いていく

一方メイカは

（これなんだっけ？、えーと、これ園田くんから教えてもらった！
！確かに教えてもらった・・・んだけど。ナンだったっけ？）

こちらは苦戦しているようだ。

3 日目、最終日と試験をこなしていった。

最終日は試験が社会しかなかったため、2 時間目は学年集会だった。

この日は主に服装検査やテスト後の注意であった。

服装検査に俺とメイカと園田がひっかってしまった。ひっかかると

みんなが帰った後も集められ、説教されるのだ。

「最近お前らはたるんどる」

と体育教師の平屋が前で叫べば

「今のうちにちゃんとしないでどうするんですか」

と学年主任の松本がヒステリックを起こし、しまいには

「禁止事項を掻い潜ろうとする反骨精神はすばらしい」

となぜか俺たちをほめるボケた先生が出てくる始末。

俺にとつては迷惑な話だ。俺たちは先生が話してる途中

「ばーか、ひっかかってやんの」

「あんただってひとのこといえねーだろ？」

「俺のほうがあんたより軽いもん」

「でもひっかかったのは事実でしょ？」

「ていうかなんでこんなことあるって教えてくんなかったのよ」

「知るかよ！！そもそもお前が引っかかるのが悪いんだろ？」

「なんでそうなるのよ？」

「だってそうだろ!!」

「いまここでケンカしたら確実に職員室行きだぞ」
と園田が止めるも

「うるせー」

「うるさい」

と2人は聞き入れず

「だいたいなお前の強引な理屈で人を振り回すところが嫌いなんだよ」
「私はあんたの・・・」

となれば園田も手が付けられない。そして

案の定俺たちは先生に見つかり、その後職員室に連れて行かれたのである

「なんでこうなるのよ」

「知るかよ!! お前がわけのわからないことでおこるからだろ?」

「もとはといえばあんたがからかったからじゃない」

と廊下で大声でケンカをしていた。

「うるさい、少しは黙りなさい!ここをどこだと思ってるんですか」
「すいません」

と2人同時に謝るのであった。

第10話 園田の誕生日に・・・（前書き）

新キャラ登場です

第10話 園田の誕生日に・・・

園田憲太郎 6月21日で15歳の誕生日を迎えた。しかし期末テストが近かったためテスト終了後にパーティーをすることになった。その前に誕生日当日の1日を見てみよう。

実は園田は毎朝5、6人の女の子が迎えにくる。しかしそれを避けるがごとくいつも裏口から登校する。そっちのほうは近道らしい。学校に到着すると女子たちがざわざわと話し出す

「園田君よ？ かつこいい」

「園田先輩、これ」

と一人の女子がなにやらコーティングされた箱をわたした。どうやらプレゼントらしい。

「ありがとう」

とお礼をいうとその子は顔を赤くして恥ずかしそうにすぐ走って去って行った。

「なんだったんだ？」

と不思議がる園田。

「やったね、あの園田先輩にわたしやったよ」

プレゼントを渡した女の子は友人とはしゃいでいた。嬉しさを隠せないようだ。

「ホントにあれでよかったの？」

「私にまかせなさい」

そして教室にいく途中智明とでくわした。

「おう！ 憲ちゃんおめでとう」

「何言ってるんだ？」

「あれ？ 憲ちゃんの誕生日って6月21日だったよね？」

「うんそうだけど・・・あ！」

と思い出したように急に大きな声をだした。

「今日誕生日だったんだ。だからか」

と園田は一人で納得した

「なにが？」

「いや、さっき校門でこれもらったんだよ」

と智明にその箱をみせる

「珍しいな、お前にプレゼントなんて。もしかして親衛隊か？」

「それはない」

園田の熱狂的なファンが集まる親衛隊がある。

「どういうことだよ」

「よくわかんないけど、規則でプレゼントを渡すのは禁止になっているらしい」

「そうなのか」

「倉田さん、どういうこと？」

「みんなの憲太郎様にプレゼントを渡すなんて」

「憲太郎LOVESの規約第3条第2項にかいてあるでしょ？神聖なる憲太郎様に個人による贈り物はしてはいけないって。わかってんの？」

と親衛隊と思われる女子3人がプレゼント渡した女の子に詰め寄った。女の子はおびえている様で戸惑っていた。

「ちよつとあんたたち、菜々（なな）ちゃんが怖がつてるでしょ？やめなさいよ」

とその女の子の友人と思われる人がとめに入った。

「だって、あの憲太郎様にプレゼントを渡したのよ！大問題よ、大問題」

「いいじゃない別に。菜々ちゃんがあんなバカげた集団に入ってるわけじゃないんだし。プレゼントぐらい」

「確かに園田先輩は顔も良くてスポーツ万能で素敵だと思うよ。思っただけ私そこまでカッコイイとは思わないな」

「なによ、私達の憲太郎様を侮辱する気？」

「私はただ、自分の意見をいっただけよ。」

「行こう？ 菜々ちゃん。こんな人たちといたらバカがうつる」

「何ですって！！！」

「まあ先輩に気に入られるようにがんばってね。無いとは思っけど」

「なによ、あの女！！」

と親衛隊の隊長と思われる一人が悔しそうに歯軋りした。

「ごめんね、美波^{みなみ}ちゃん」

「別にいいって。でもよかった。自分から行動したのって初めてじゃない。それが私嬉しいの」

と嬉しそうな美波。

「いや、美波ちゃんのおかげだよ。渡せたのは美波ちゃんが私の背中をおしてくれたから」

（やっぱり美波ちゃんはすごいな）

そして昼休み

憲太郎たちはいつもの5人と話していた。

「今朝、プレゼントもらったんだよな。開けたのか？」
と智明が聞いた

「いやまだ」

「なんだろうな、開けてみるよ」

と浜島がいう。

「なに、なに？」

とメイカは興味津々

「早く、早く」

と里奈が催促する。

開けてみる

「なんだこれ？」

「え？ うそだろ」

「これ？ ちょっと頭ずれてんじゃないのか」

「今何月だと思ってたんだ？」

「まあいいじゃん、くれた子はくれた子なりに考えてくれたでしよう」

「でも・・・」

「ね・・・」

中身は手編みのマフラーだった。それは1ヶ月前のことだった。菜々と美波は菜々の部屋で遊んでいた

「ねえ？美波ちゃん？」

「なに？」

「男の人が喜ぶプレゼントってなにな？」

「うーん・・・なんだろうね・・・ってどうしたのよ？突然」

「もしかして先輩に？」

と興奮気味に聞く美波。

恥ずかしそうにうなずく菜々。

「ホントに？よかった！自分からしたいって言ったの初めてだよ」

「でいつなのよ？先輩の誕生日」

「6月21日」

「1ヵ月後か・・・そうだ！」

「思いついたの？」

「手作りよ、手作り。そう男は手作りに弱い！」

と菜々は美波に言いわたしたものを買ったために近くの百貨に行った。

「これとこれね」

と買ってきたのはなにやら棒と毛糸。

「これでいいの？美波ちゃん」

「うん」

「それでこれでなにすんの？」

「マフラーよ、手編みのマフラー。」

「マフラーか、いいね。寒い時とか暖かそう」

「さっそくやろうよ」

と菜々がマフラーを編み始めた。

「ここはこうでそこは・・・」

と美波はレクチャーし菜々はどんどん編んでゆく。

「あつい・・・」

と袖で汗をぬぐう菜々。

「そこはそうじゃない。あちゃ・・・」

と美波はがっかりする。

「また最初からなの？」

「いや、そこまでじゃないから大丈夫よ」

とちよつとしたミスもありながら編んでいき
そしてついに

「やった〜完成だよ。」

「これできつと喜ぶよ。先輩」

「そうかな」

と嬉しそうに言う。

「うん。いい顔してる」

「ほら自信を持つ。あんたならきつと先輩OKよ」
と励ます美波。

「ホントにあれでよかったのかな？」

「大丈夫よ。自信持つて」

と昼休みに2人が歩きながら話していた。

「ちよつとトイレ」

と美波はトイレに行き、菜々は美波を待っていた。

「園田君、平屋先生が呼んでたわよ」

「わかった、それでどこにいるんだ？」

「たぶん外だと思うけど」

「わかった」

すると親衛隊の3人がやってきて

「よくも私達の憲太郎様にプレゼント渡してくれたわね」

「わかってるんでしょうね」

とどンドン菜々に詰め寄っていき、そしてだんだん壁際に追い込まれていく。そしてついに菜々は囲まれた。

トイレから出た美波はそれに気づく

「菜々ちゃん」

「違反した罰則受けてもらっわよ」

怯える菜々。

手を振りかざす親衛隊の隊長。

菜々は目をつぶった。

しかし何の衝撃もなかったので恐る恐る目を開けてみる。

するとそこには腕をつかんだ園田がいた

「これはどういうことだい？説明してもらおうか」

「先輩！！！」

と嬉しそうに菜々は園田の後ろに行った。一方3人は驚きを隠せな
いようだった

「これは・・・」

「この人憲太郎LOVESの規約を破ったんです。」

「だから・・・」

「だから？」

「罰を」

「いくら規則を破ったからってこういう卑怯なやり方は見過ごせな
いな。この俺を尊敬してくれるのはありがたいけど」

優しい笑顔でいった。その中に3人は怖さを感じたようだ。

「憲太郎様が助けにもらったからっていい気になんないでよね」

と3人は逃げるように去っていった。

「大丈夫？ケガは？」

「ないです」

と緊張する菜々

物陰からみる美波

（がんばって）

「たく、ごめんねあいつらが迷惑かけちゃって」

「いえ、そんなことないですよ」

「あいつらやり過ぎなとこはあるけど、根はみんないい奴だから。
あんまり悪く思わないでくれ」

「はい」

今朝のことを思い出し

「プレゼントありがとう。とても気に入ったよ」

「ありがとうございます」

と顔を赤くする菜々。

いい雰囲気の2人

「あのさ、聞きたいことあるんだけどさ。いいかな？」

「なんですか？」

「なんでこの時期にマフラーなのかな？」

（あ！）

と気づく美波であつた

第10話 園田の誕生日に・・・（後書き）

読んでいただいた皆さん本当にありがとうございます。ついに10話までいかせていただきました。

できればダメ出ししていただければ嬉しいです

第11話 メイカの・・・（前書き）

たぶんいろいろと矛盾してるところあるかも・・・

第11話 メイカの・・・

4月の末、ゴールデンウィークが始まった頃

ほんのくちくさなできごとにく

と俺のケータイがなった。

「もしもし」

「あつ塚瀬くんちょっと来て欲しいんだけど？」

「ふざけんな！！今何時だと思ってるんだよ！！」

時計は6時を指していた。

「今すぐじゃないわよ。9時に白多駅のあの鈴のところに集合ね。」

「おい！勝手に決めんなよ。うちからただけかかるかわかってんのかよ」

「なによ？この間の勝負に負けたでしょ？」

「桜井？」

「ならそういうことで。遅れないでよ」

「ちよつと待ってって」

ブチッ

プ～プ～プ～

と切れた。

「たくつ人の都合もおかまいなしかよ・・・」

この間の体力測定で負けてからというものの俺は地獄の日々を送っていた。

そして約束の時間指定された場所に行くと

「あれメイカちゃんまだ来てないね」

「なにやってんだろうね？」

と女の子が話していた。見知らぬ人たちだった

「桜井のやつまだきてねえのかよ。」

そして10分後

「おまたせ」

とメイカがやってきた。

「遅い」

「そせゝぞ」

と女の子と俺が同時に言った。

驚く2人。メイカの知り合いのようだ。

「え？あなたは？」

と聞く一人の女の子。

「どうも、塚瀬です」

「メイカちゃん？どういうこと？」

もう一人の女の子がメイカに聞いた。

メイカは俺を指差して

「この人？この人は私のパシリ。今日は荷物もちしてくれるって」

「おい！いつからパシリになった？それになんで荷物もちなんだよ。」

「

「何言ってるのよ？あんた体力測定に負けたじゃない。それに男の子が荷物もちは当たり前でしょ？」

「勝手に決めやがって。それでなんで俺が朝っぱらから」

「ちよつと2人とも」

と止めに入る女の子

「忘れたの？私に負けたら言いなりになるって」

「知るかよ、だいたいお前が先にけしかけたんじゃないか」

「なによ？のつたのはあなたでしょ？」

そしてその女の子がしびれを切らしたのか

「いいかげんにしろゝゝゝ！！！」

とメイカに横から右ストレートが炸裂した。

「ちよつと、なにすんのよ」

とパンチが飛んできた方向をにらみ付けると

「いくよ」

とものすごい形相でにらみ付けていった。

「はい」

そして俺たちは歩き出した。

メイカの話によればメイカの前の学校の友人、玉山明日香ちゃんと松本和美ちゃんはこのゴールデンウィークを利用して遊びに来たという。しかしメイカはきたばかりであんまりわからないため、俺を荷物もちを兼ねて案内して欲しいということだ。

「ごめんね？明日香ちゃん。」

と謝るメイカ。

「いいよ。いつものことだから」

（こわ〜！！この人怒らせたら命がいくつあってもたんねーかも・・・）

「やっぱり明日香ちゃんのは効くよ」

「ごめんね、なんか見苦しいもの見せちゃって」

「いいよ、全然気にしてないから」

「てかこつちがすつきりしたし」

と俺はぼそつとつぶやいた

「なんかいいました？」

「いえ別に」

と話して最初に向かったのはこの街一番の繁華街地神だ。

ここはいろんな店が立ち並んでいる。

「あ！ここにはあったんだ、あの店」

とメイカがはしゃぐ。その店は中高生に人気なブランド店だった。

「そうだよ、メイカ来てまだ1ヶ月もたつてないんだもんね」

（あいつにも好きなものとかあったんだ。）

「入ろうよ、入ろうよ」

とねだるメイカ。

「時間まだあるし、でも・・・どうします？」

「いいよ、私は別に」

「特にいきたいところないから」

ということとそこに入ることになった。

「あれもいい、これもいい、」

はしゃぐのはメイカだった。

（へーあんな桜井はじめて見た）

「これ着よう。塚瀬くん？」

「なんだ？」

「くれぐれも覗かないでね」

「しねえーよ！そんなこと」

「前科があるから」

「それはお前が無理やり入れたんだろうが」

メイカは試着室に入っていた

「見てみて、これ」

と俺に見せつけた

（かわいいー。まじかわいい）

ドキツとした。

「なんだ？それ」

「全然似合ってねえーよ」

「どこがあってないって言うの？」

「ん？全部」

「どういうことよ」

と胸ぐらつかまれた

「しかたないだろ？似合っていないものはにあってないんだから」

「いやそんなことないよ？めちゃくちゃ似合ってる」

「かわいいよメイカちゃん」

と言われ

「そうかな？」

と照れるメイカであった

「調子乗ってんじゃねえよ」

「ということでこれとこれお願いね」

「何言ってるんだ？」

「あんたが払うにきまつてるでしょ？」

「ふざけんなよ？なんで俺がはらわないといけねーんだよ？」

「当たり前でしょ？この間負けたじゃない」

「また出たよ・・・」

「いいわよ？別に逆らったって。この人々のぞ・・・」

と突然大声を出し、思わず俺は

「わかった、わかった。買ってやるから」

と俺は6000円を払うハメになった。

「メイカってホントわかりやすいよね」

「やっぱりメイカはメイカだね」

「はい、荷物」

と渡され俺たちは店を後にした。

「よし！！一肌脱いでやりますか？」

となにか明日香思いついたように言った

「どうしよつか？ご飯はまだ早すぎるし」

「そうだ！！映画見にいきましょうよ」

一行は映画館にいった。

「何見ようか？」

「いまこの映画人気なんですよ。」

「げっ！」

「あ！これ前から見たかったんだ。これ見ようよ」

と明日香ちゃんたちと話していた。

「待ってちよつといいかな」

と明日香たちをつれだして

「なんでこうするのよ、私が怖いのが苦手なのしってるでしょ？」

「へーそうだったの？知らなかった。知ってた？和美ちゃん」

「いや。私も初耳」

と2人の白々しい態度に

「あんたたち・・・」

とメイカは拳を握り締めた

と白々しく明日香がいった。

結局俺たちは人気のホラー映画を見ることになった。

「きゃー!!!」

と怖いシーンになって

隣のメイカに強く手を握られ

「イタタタ、なにすんだよ」

と俺は小声で怒鳴った。

「ごめん・・・」

(触ってしまった・・・思わずあいつの手を)

とメイカはがっかりした

「きゃー」

「イテテテ」

の繰り返しで結局まともに見られなかった

「おもしろかったですね」

「うん・・・でもまともに見られなかったよ誰かさんのせいで」

「なんかさ怖いシーンとか盛り上がるシーンになると力いっぱい強く手を握ってくるやつがとなりについてさ」

と俺はわざとメイカに視線を向けて話した。

「なによ？私のこと？」

「そうだよ。だいたいなんだよあのバカ力。手が折れるかと思った」

「仕方ないでしょ？話にのめりこんだら体に力はいりこむんだから」

「それにしても入れすぎだろ？アームレスリングの世界チャンピオンでも目指してんのか？」

「そんなわけないでしょ」

「はい、はいそこまで」

と明日香が止めにはいる。

「うるさい」

と反抗するメイカ

「おい桜井ここはやめとこうぜ。明日香ちゃんの右ストレートくらいいたいのか？また」

と俺はメイカをなだめた。しかし聞き入れるはずも無く

「そんナン関係ないわよ」

「関係あるわよ」

とまた明日香の右ストレートが炸裂した

「だからいったら」

「はい反省してます・・・」

この後昼食を食べ、いろんなお店や有名な場所にいった。穴場などもいった。

そして夕方

「山口公園にいきたいです」

と和美が言い出した。そこはデートスポットで有名なところだ。

「なぜにまた？」

「ここに来るなら絶対に外せないと思ひまして」

（ナイス！！和美ちゃん）

「カップルがたくさんいるんだよ？」

「それがいいんですよ」

「西日に照らされる海。それをバックに向かい合い口づけでお互いを感じあう・・・なんていい所なんでしょう」

「勝手に妄想してる」

とあっさり明日香がツッコんだ。

山口公園に到着。

「ちよつとトイレに行ってくるね」

と2人は俺とメイカを残してさっさといった。

（後は2人でなんとかしなさい）

「なんでここで2人きりにするのよ。しかもよりによってあんたと・

・・」

「俺だつてやだよ」

「たく、あいつら私達のこと勘違いしてるみたいね」

「困るよな」こういうの。気使われてる感じで」

「あいつらはいつもこうなの。私がこういう性格だからすぐおせっかい焼きたがるんだから。余計なお世話って感じなんだけどね」

「良かった。」

「なにが？」

「自分から自分のこと話すの初めてだからさ」

顔を赤くするメイカ。

いい雰囲気の人

（なんだよ？この雰囲気。なんでこんなやつに俺はドキドキしてるんだ？）

「私、私ね・・・私・・・」

「どうした？」

「やっぱいいや」

「でてきなさい。トイレじゃないんでしょ？」

とメイカが言うと言わらぬ中から2人がでてきた。

「ばれちゃったか」

「私のあとはなんなの？ねえなんなの？」

「なんでもないわよ」

（ありがとう2人とも）

そして翌日明日香たちは帰っていった。

帰っていくときに

「メイカのことよろしくね？ああいうやつだからふりまわされるだろうけど。」

「昨日はごめんなさい。でもメイカちゃんはおあでもしなないと思
いまして。あの子には元気でいてもらいたいですからね。」

「がんばんな彼氏くん」

「違うって」

「一つ質問いいですか？めいかちゃんのどこを好きになったんです
ようか？」

「だからそんなんじゃないって」

とそれぞれに耳元で言われた。

「お前、前の学校にも一応友達いたんだな」

「どういう意味よ？それ？」

「おまえ、前の学校じゃ孤立してたのかと思ってさ」

「どうしてそう見えるのよ？」

「お前の性格にきいてみるよ。節穴女」

「なんですって?!?!」

（いい友達を見つけたな。大切にすんだぞ）

第12話 パーティーに・・・

期末テストも終わり、みんな羽をのばしていた。この日は延期になっていた園田の誕生日である。開始時間は7時。みんなそれぞれおもしろいものにそれまでの時間を過ごしていた。

菜々の家では・・・

「これは派手すぎるな、これはちよつと地味かな」

「いいって美波ちゃん、そんなに」

「ダメよ。好きな人の前なのよ？しつかりよく見せなきゃ」

「ホントにいいって。早くしないと遅れちゃうよ？」

「そんなの、あんたをベストにすることに比べたらへでもないわ。それにちよつと遅れてきた方が」

「すいません、服選びに時間がかつちゃてちよつと遅れちゃいました」

「そうなんだ。今日の服とても似合ってる。かわいいよ菜々ちゃん」
「そうですか？」

「うん。とてもかわいい」

「俺、菜々ちゃんのことすきになっちゃった」

「ってなるかもしれないわよ」

「そうかな？そうかな？」

とありえない妄想に何の疑いも無くその気になる菜々だった。

「今日はチャンスよ。菜々ちゃん。先輩に少しでも近づけるようにするのよ。いいわね？」

そついう美波に自信がないような顔をする

「そんな暗いかおしない！！もつと自分に自信持つてよ？菜々ちゃんはおかしいんだから大丈夫よ」

「でもこの間のプレゼントのこともあるし・・・」

「何言つてんのよ！向こうから誘つてきたのよ？そんな気にしてないって」

助けられたあの日は先輩にマフラーの理由を聞かれた後

「あ！そうそう今度友達の家で俺の誕生日会をしてくれるみたいだから良かったらきなよ」

「ありがとうございます」

（やったー！！先輩から・・・）

「美波ちゃん、美波ちゃん？私先輩から誘われちゃった！！」

「よかったじゃない！！私が服選んであげる」

「うんわかった」

先輩から誘われ後日地図をもらったんです。そして今日ついにこの日

「よし！！これでいい。」

「めっちゃめっちゃかわいいよ。これなら先輩もいちころね。」

「そうかな？」

と嬉しそうに言う菜々。

「よし！！行くわよ。準備して」

「もうしたよ。」

「地図持った？」

「あ！忘れてたちょっと待ってて」

と菜々は地図取りに行った。

「確かこの辺だったような・・・あった」

と二人は家を出た。

「確か塚瀬っていう先輩の家だったよね」

「うん」

「ここからのくらいかかるかな」

「だいたい島駅から5分っていったからここからだとか30分くらいじゃないかな」

と駅に向かっていると後ろから帽子をかぶり、マスクをした明らかに不審者が美波のカバンを取っていった。そして2人は倒れた。

「イタタタ、大丈夫？菜々ちゃん」

「あんにやろー！！美波のカバンって行きやがった！！追うぞ」

といきなり菜々は豹変した。そう彼女は友達や家族など身近な他人に危害が加わると豹変するのだ。

「ちよつと菜々ちゃん？」

菜々は美波の手を引つ張り追いかけた。

「うわゝ手離してよ菜々ちゃん」

「待てー！！コラー！！」

（やべ、追いかけてきやがった・・・まあ女だし）

菜々は猛スピードで追いかける。

（はやっ！！追いつかれる。どうしよう）

焦るひつたくり犯。

そしてあつという間に追いつき、はにかむような笑顔で

「おい！このヤロウ美波のバッグ返さんかい！！！」

と菜々が顔面パンチ。ひつたくり犯KO。

「あれ？ここどこなの？美波ちゃん？」

目のまへの引つたくり犯をみるなり

「大丈夫ですか？誰にやられたんでしょうか？」

と言う始末。

（あんただよ。あんた）

どうやらその間の記憶はないようだ。

そして無事に美波のバッグは戻り、犯人は捕まった。

ひつたくりが解決したのはいいが、犯人を追いかけているうちに2

人は完全に迷ってしまった。

「ここどこなの？美波ちゃん」

「知らないわよ。だいたいあんたが・・・」

（そうだった。そういえばさっきのこと覚えてないんだっけ）

「私がどうしたの？」

「いやなんでもない」

「ホントここどこなの？そっぴや地図あったよね。見せて」

「うん。ちよつと待てて」

「はい」

「・・・・・・」

「いま、日本だから・・・ってこれ世界地図じゃん。しかもなんか落書きしてあるし。どうやったら世界地図とまちがえるわけ？」

「ごめん」

「しょうがない。交番いこうよ
しかし・・・」

「ここって繁華街だよ？どうみても」

「そうだね。繁華街だね」

「なのになんで一個も交番ないのよ！！おかしいと思わない？」

「うん、おかしいね」

ふと見てみると交番が

「あつたよ？美波ちゃん」

（やったー）

交番が天国に見えた。それもつかの間

「あのーここから栗山駅までどういけばいいですか？」

と聞く美波

「こうってここから右にいつてますっく行つて・・・」

とその警官は美波の背中をなぞった。

「ひい」

「なにするんですか？」

「ごめん。つい手が滑っちゃって」

「なにしとんじゃー！！お前は」

「め、恵さん！！」

「また女の子にちょっかいたして。やっぱ真木くん1人には任せられないわね。」

「ていうか、よくそれで警官になれたわね」

「恵さんだつて人の事・・・」

「なんかいった？」

「いや、なにも」

「ごめんね、あなたたち。後できつゝく言い聞かせときますから、きつゝく」

そして行き方を聞いた2人は出発。
知ってる道に出る寸前に

「あの子たちけっこうかわいくない？」

と話しているのは智明のクラスメートである真木と遠藤だった。

「どうする？いくか？」

「最近声もかけらんなかったもんな。テストで」

「ねえ、君たちこれからひま？」

「すいません、これから塚瀬という先輩の家でパーティーがあるんで」

と菜々が言う

「バカ！！なんでこんなやつらに真面目に答えてんのよ」

「だってひまって聞いてたから」

と菜々が言うため息をついてこう言った。

「あのね？このひとたちはナンパしてんの、シカトときゃいいのよ」

（もしかして）

とよぎる真木と遠藤。

「君たち塚瀬って言う人の家ってどこ」

「場所はわからないですけど、島駅の近くって言ってました」
と菜々は答える

（間違いない！！）

「なんでまた答えるのよ」

「いけなかったの？」

「当たり前でしょ？」

「あいつ！！里奈ちゃんという人がいながらメイカちゃんにのりかえ、今度はこんなかわいい子をたぶらかすとは！！許せん」

「いくか？」

「いくにきまつてんだろ」

「あの人たちなにぶつぶついつてんだろ？とにかく私達急いでるんで、失礼します。」

「俺たちもつれつてつてもらえるかな」

「なんでですか？」

「行くわよ、菜々ちゃん」

「ちよつと待つてようお願いだよ」

すると美波はにらみつけて

「急いでるっていつてるのがわかんないの？」

「ひ」

真木たちに膝蹴り、右ストレート、左ストレートにアップパー、ハイキック、そしておれたところに上に乗り往復ビンタ100連発、逆エビ固めで2人ともノックアウト。

「ごめんなさい、やりすぎちゃった」

美波たちはそそくさとさつてしまった。

「もうホントに遅刻だよ」

「わかった急ごう」

そして菜々たちは急いで駅に行き電車に乗った。

「なんとかそんなに遅刻しなくてすみそうね」

「はあはあそうだね」

そして島駅に到着。

「たしかこの辺だとおもうけど」

「あれじゃない？」

「あつた」

ピンポン

「いらつしゃい、君たちは？」

「智？この人だよ、俺に手編みのマフラーくれたの？あれ？君は」

「ああ、あの菜々ちゃんの友達で橘美波です。よろしくおねがいします」

「呼んでたんだね」

と無事に智明の家に到着した

その頃・・・

「世の中には怖い女の人もあるんだな修司」

「そうだね・・・勉強になったよ信一郎君」
とよろめきながら帰る2人であつた。

第13話 パーティーで・・・II（前書き）

とあることが発覚？

第13話 パーティーで・・・II

「このテーブルあっちに持っていった」

「この料理はここにおいてっと」

「メイカちゃん？ちよつとここ持って？」

「ちよつと待つてよ。浜島くん」

「ねえ？このから揚げどこにおくの？」

「ああ、それはあそ・・・」

と里奈とメイカと浜島はなにやら準備をしているようだ。なんの準備かと言えば延期になっていた園田の誕生日パーティーである。会場が姉と兄が両方出張ということではなぜか俺の家になったのが納得がいかないところだが・・・

俺たちは部活を早く切り上げパーティー家に向かっていた。のだが「開始時間まで後10分。いそがねえとはじまんねえぜ？主役なんだから」

「これが終わってから」

と俺たちはゲーセンにいた。

「よっしゃー！！これで10人抜き」

「いかないとまじでやばいつて。この辺でやめとこうぜ。これバレたら桜井になって言われるかわかんないだよ」

と言うがきかない園田。

「こいつつえゝぞ」

「まじで」

「どこどこ」

と人が集まってきて収集がつかなくなった。

「いくぞ」

と園田を強引に引っ張った。

「なにすんだよ」

「じかんがねえゝんだ。しょうがねえだろ？」

「あゝあ10人抜きだったのに」
「文句言わない」

と俺たちはゲーセンを後にした。
そして走り出した。

「やばいつて確実に遅刻だ・・・」

「里奈ちゃんもう食べようよ？」

「そうだよ、先食べちゃおうよ。30分待っても帰ってこないんだよ？」

「ダメよ。まだ智明と園田くんがきてないんだから。智明はともかく主役がいらないと意味が無いの。」

「はゝい」

「わかったよ」

と言いつつ

(ちよつとぐらいなら)

(よし！里奈ちゃんよそ見してる。その間に)
と料理に手を伸ばす2人。

その瞬間里奈は目つきが変わり
パシッパシッ

「痛い」

「いてゝ」

と2人の手をたたいた。

「コラ！！つまみ食いはダメ。」

「反応はやくねえゝ」

「うん・・・一瞬だったよね」

と2人はヒソヒソ話をするように小さい声で話していた。

「え？なに」

「いや別に」

「もしオリンピックにゴキブリ叩きっていう競技があったら間違いなく金メダルだね」

「だね・・・」

「なに2人で話してるの？」

「なんでもないよ、なんでもない」

と3人がやっている

「ただいま・・・ハアハア」

と俺たちは息切れしながらもなんとか家に着いた。

「やっと帰ってきた」

俺たちは居間にいった。

「ごめん。遅くなって」

「ホント遅かったわね。どうしたの」

「憲ちゃんはどうしてもゲーセン行くって言い出してよ？」

「なんでとめなかったのよ！！！！？」

とメイカがキレだした。

「とめたさ！！今日はガマンしろつて。でも聞かなくて・・・」

「力づくでも連れてくればよかったでしょ！！！？そうか・・・そ

んな力なかったね。体力測定も私の圧勝だったし」

「お前が尋常じゃない記録だすからだろ？」

「確かに」

「言えてる」

「うんうん」

「俺はなちゃんと人並みに運動神経も力もあんの。」

「こういうことしてたから料理もう冷めたじゃない！！！！」

「知らねーよ。お前からいつてきたんだろうが」

「ケンカする前からもう冷めてただけ・・・」

と里奈がつぶやく。

「もとはといえばあんたが園田くんをつれまわすからでしょ？」

「ちげえよ！！逆だよ！！逆！！」

「その辺にしとけて」

「メイカも落ち着いて」

と園田と里奈が止めに入った。

そしてケンカはおさまった。

「じゃゝはじめよつか？」

とみんなグラスを持って

「憲ちゃん、少し遅れてるけど誕生日おめでとう、かんぱゝい！！」

「かんぱゝい」

みんなグラスをぶつける。そして料理に手を伸ばす。

俺も手を伸ばすとパシッと叩かれた。見てみるとメイ力であった。

「いてつなにすんだよ？」

「園田君を連れまわしたバツあんたは食べれないの」

「なんでそうなんだよ！！」

「みんなお腹すかせて待ってたんだから当然よ」

「必死の思いで憲ちゃんを連れてきてこれかよ」

「なによもんくあ・・」

「はいはい、わかったから」

「落ち着こうね」

と收拾がつき食べ始めた。

「やっぱ里奈ちゃんの料理がうめえよな」

「うん。冷めてもいける」

という話し、食べていた。しばらくして

ピンポンとなり

「あれ？誰だろう？」

参加人数全部だよねと思いついてみると見知らぬ女の子2人がいた

「いらつしやい！！君たちは？」

と聞く俺。すると園田がでてきた。

「智？この人だよ、俺に手編みのマフラーくれたの？あれ？君は」

「ああ、あの菜々ちゃんの友達で橘美波です。よろしくおねがいします」

「呼んでたんだね」

「あがつて？」

「おじゃまします」

と入る2人。

戻ってみると俺が強引に取った料理が無くなっていた。

「あれ！！おれのが無くなってる・・・」

「当たり前でしょ？」

「なんでだよ？」

「いったでしょ？園田君を連れまわしたあげく、30分以上遅刻して、冷えた料理を食べるハメになったバツ」

「だからなんでそうなんだよ！！おれはどっちかといえば被害者なんだぞ。被害者！！」

「でも30分以上遅れてきたのは事実でしょ？」

「そりゃ・・・そうだけど。だからって俺の料理なしってひどいだろう！！」

「なによ？文句ある？」

「大ありだよ！！！」

「ああ、もう2人ともやめなさい」

「そこまでにしとけて」

「やれ、もつとやれ」

とはやし立てる浜島。そしていつものように

「お前はひっこんでろ」

「浜島君はだまって」

と2人にふつとばされる。

この光景を見て笑う菜々。そして顔を引きつかせる美波。

（え？どうなってんの？これ）

「ごめんね、来て早々こんなんで、ちょっとコラ」

「全然気にしてませんよ。楽しそうでいいじゃないですか」

（うそ・・・？これが？）

「さあ祐一はほつといて食べよつか？」

とみんな座った

「ほら菜々ちゃんはその」

と菜々は園田の隣に座ることになった

「おいしいです！！！高橋先輩の料理」

「そう？ありがとう」

と微笑む里奈

ドキツとする園田

（あれ？今のはなんだったんだ？）

そしてあっという間に皿は何もなくなった。

そしてケーキが出てきた。

「これも里奈さんがつくったんですか？」

「ええ、そうよ」

「おいしそ〜」

「そうだね」

そして電気を消してろうそくに火をつけた。

「ハッピバースデートゥーユーハッピバースデートゥーユー・・・」

と園田が火を消すと同時に浜島が目を覚ました。

「イテテテテ」

と頭を片手でおさえる浜島。

まもなく

「なんだこの2人の美女は？」

と浜島は2人に飛び込んでいった。

「キャー！！！！」

「おい！！祐一」

「やめろつて」

浜島は獲物を見つけた野獣のように2人に迫っていく。

気がついたばかりで浜島はよくみえていない

（はあゝあのバカあいかわらずなんだから）

と美波は立ち向かった。

「美波ちゃん？あぶないって」

肘鉄を浜島に食らわせた。そしてまた気絶した。

「たくっ・・・かわいい子みたらいつもこうなんだから。このバカ

兄貴」

と美波はつぶやいた。

「どうしたの？美波ちゃん」

「ううん、なんでもない」

（祐一のやつ・・・まあこんなのもアリか。ありがとな、みんな）

第14話 テストの・・・

「ではテストを返します。机は問題用紙と赤ペンだけにしてください」

テストが終わって3日後まず国語の結果が返ってきた。

「麻生くん、阿部くん、井上くん、浦上くん・・・」

と答案用紙が返ってくる。

「やったー」

「まじで・・・」

「こんなもんだろ」

とテストの結果の反応も様々。

「塚瀬くん」

と俺の名前が呼ばれた。

（そうだ、これで奴隷生活から開放される！！）

答案用紙を持って点数を見ながら席に戻っていった。

0点

（うそだろ！！！そっか・・・言い争いしてたもんな。）

俺のを見たメイカは

（ばかだね）

ずっと見てくるメイカに俺は

「なによ？その点数」

「聞かないでくれ・・・」

と俺は沈んだ

そして

「桜井さん」

とメイカが呼ばれる。

「桜井さんは最高の48点！！！！」

「すごい！！桜井さん」

「さすが！！メイカちゃん」

とクラスの人に褒められる。

「いやゝそんな」

と照れるメイカ

「だったんだけど名前かいてなかったよ。それにテスト中にケンカしてたから」

「なんだよ、それ」

と落胆する教室。

メイカが席に戻ると俺は

「ハハハお前も人の事言えねえじゃん。まあ残念だったな」と言つと気に障つたらしく

「なによ、あんたのせいでしょ？」

「なんでだよ!!」

「あんたがカンニングするからでしょ!!」

「してねえよ。いったる？あれはお前の勘違い!!」

「それに私の答案見たんならなんで・・・」

「やれ、やれ!!」

といつものようにはやしたてる浜島

先生はため息をつき

「コラ!!なんでいつも、いつもケンカして飽きないのかね・・・?」

「だってこいつが」

と俺たちはお互いをゆびさして

「わかった、わかった。後で職員室ね」

「なんでですか」

と俺たちが抗議した。

「それはね・・・あんたたちがそうやっていちゃイチャしてるのが気に食わないのよ!!!」

と隣の教室に響くぐらい国語の先生は叫んだ

「どういふ先生だよ・・・」

「ほんとの反面教師ね・・・」

「ああいう大人になりたくないね」

「うんうん」

俺たちが初めてケンカするのがバカらしくなった瞬間だった。

俺たちの国語の先生田中はルックスもスタイルも抜群なので言い寄ってくる男は必ず

いるはずである。しかしなぜか誰も言い寄ってはこない。そのためか、カップルやいい感じの人たちをみるとイライラするみたいだ。

そして休み時間

「は〜」

と俺たちがため息してると

「とんだ災難だったな」

と浜島が話しかけてきた。

「ホントだよ」

「あんなんでよく教師やってるよね？」

「浮いた話がでてこないわけだ」

「うんうん」

と田中先生に誰も言い寄ってこない理由がわかった気がした。

2時間目はボロボロであつた数学である

「塚瀬くん」

と呼ばれる俺。

32点

（よっしゃー！！！！意外にできてる！！！！ありがとう神様、仏様）

と喜んで席に戻った。

（やるじゃない）

「やったー。ホントに良かった」

「何喜んでんのよ。こんな点数で」

「いいじゃねえか、思ってたより良かったんだから」とケンカしてると

「桜井さん」

と呼ばれて、返されたテストを見ながら戻ってきた。どうやらいら立ってるようだ。

23点

（なに！！俺が42点だと！！！！）

と浜島は泣きながら戻っていった。

「なんだよ？その点数、だせー半分もいってねえーじゃん！！せつかく祐一が教えたのに。ほら、祐一泣いてるぞ」

とイヤミを言う

「なによ？自分が点数良かったからって調子乗ってんじゃないわよ」「事実を言ったまでだろ？」

「なんですって」

「なんだよ」

とにらみ合う俺たち

「ホントこりないね」

「さっきのこと忘れたのかな？」

ともう1人の学級委員の森田と木原話していた

「コラ、そこ？」

と数学の大西と注意してこっちに向かってくる

「やめなさい、なかよくしようよ、ね？2人とも」

「うるさい、これは2人の問題なの！！」

「おやじは、ひっこんでろ」

と俺たちが言う

「はいい」

と大西はひるんだ

「あなたたち、いい加減にしなさい！！授業のジャマでしょ？あなた学級委員でしょ？しっかりしなさいよ」

と森田がすごい見幕で立ち上がった

「すいません・・・」

と謝る俺たち

「わかればよろしい」

とニコツと笑って去っていった

（なんだよ！！あいつ）

と俺は嫌な気分になった。

（やったー！！塚瀬くんとしやべっちゃった）

と嬉しそうな森田。しかし顔はポーカーフェイスである。

3時間目は得意な英語

「塚瀬くん」

と呼ばれテストが返される

点数を見ると48点

（くそーーーー！！後1問だったのに）

「桜井さん。桜井さんは満点でした。よくがんばったわね」

（智明に教えてもらったんだもん。当たり前じゃん）

「やっぱすげー！！！！桜井さんって勉強もできて、スポーツ万能で、かわいくて・・・まさにパーフェクトだな」

と俺の後ろの西田が言ってきた

確かに、胸もでかいし、運動できるし、勉強もできる。それになんといってもかわいい。俺にはもったいないくらいだ。性格さえ直せば・・・

「性格を直せばな」

と俺が言つと

戻ってきたメイカに

「それ、どういうことよ」

「だって事実だし」

「どこが事実よ、どこが！！！！」

とテストが帰ってくるたびにケンカしてはいつも森田に怒られるのだった。

そしてテスト返しが始まって3日後テストは全て返された。
結果はこうだ

俺

国語	0点	ホントは	42点
数学	32点		
理科	36点		
社会	44点		
英語	48点		
計	160点		

メイカ

国語	0点	ホントは	48点
数学	24点		
理科	45点		
社会	46点		
英語	50点		
計	165点		

「結局合計どうだった？」

「165点だった」

「くそー負けた〜。奴隷生活見送りかよ・・・」
と残念がると

「あー！そういうばそんな話あったわね。忘れてた」
(・・・忘れてた・・・？)

「さっそくだけどジュース買ってきて？」
「そうー！俺は墓穴を掘ったのであった。」

第15話 浜島と・・・（前書き）

浜島君についてのお話

第15話 浜島と・・・

テストの結果も戻り、夏休みをいまや遅しとまっていた休日。それは何気ない休日であった。

「祐一？あんた、ちゃんと部屋片付けなさい。足の踏み場もなかったわよ」

「勝手に人の部屋に入るなっっていうつも言てるだろ？」

「ちゃんと片付けなさいよ？」

「そのうちな」

「そのうちじゃダメ！！」

と母親は鬼のような真顔で言った。

「わかったよ。やればいいんだろ？」

祐一は母と2人暮らし。そう母子家庭なのである。

部屋に戻った祐一は部屋を見渡す

「確かに足の踏み場ねえな・・・」

服は散乱し、どれが洗濯物かもわからない。

食べたものは置きっぱなし、カビが生えている茶碗も・・・

雑誌なども散乱、どれがゴミなのかも区別がつかない

「さてと片付けよう」

と取り掛かる祐一

その頃美波は菜々と自分の部屋で遊んでいた

「ハハハハ。このマンガ面白い」

菜々はマンガを読み終え棚に戻していく。しかし

「きゃっ！！！」

とコードにつまずき棚が倒れる

ガシャン

「アイタタタタ」

「大丈夫？」

「うん・・・」

「全くもう菜々ちゃんたら・・・ケガない？」

「大丈夫よ。それよりこれを何とかしなきゃね」

と菜々は一瞬にしてちらかった部屋をみていった

臭いをかく祐一

「くさっ！！これ洗濯と」

「うん、これは・・・わ」

それは使用済みのティッシュだった。

この部屋にはゴミ箱はないのだろうか・・・

と整理していると一冊の大きな本を見つけた

「なんだろう」

と開けてみると小さな頃アルバムであつた

どんどん片付けていく美波の部屋。すると菜々が大きなアルバムを見つけた

「なにこれ？」

と開けてみる

「わっかわいい！！これ、美波ちゃん？」

「うん、そうだよ。」

と質問に答える美波。

「で隣で元気にピースしてる人は？」

「あゝこれ・・・お兄ちゃん」

美波はうつむいて小さな声で言った

「え？美波ちゃん兄弟いたんだ」

「うん実はね。でも今は別々に暮らしてるけどね。このことはあんまり言いたくないんだけど。菜々ちゃんならいいわよ」

「ちようど今頃だったかな？その日も今日のように夏になったばかりの暑さだったわね」

「私たちは・・・」

と美波は話し始めた。

「うわゝ美波だ。懐かしいな。今頃だったな。あれからもう10年か・・・」

俺は浜島祐一、旧姓橘祐一。

俺には、1つ下の美波という妹がいた。とてもかわいくて、俺にいつも引つ付いて離れなかった

友達と遊ぶ時も

「また着いてきたよ」

「いいって別に、気にすんなよ。美波ちゃん、お兄ちゃんと一緒にいたいもんね」

「ね」

と友達美波と一緒に同意した

「お前な・・・」

「もつと優しくしろって、いいな兄妹がいて」

「俺は一人っ子だからさ」

「ねえゝ美波ちゃん？お兄ちゃんのどこが好き」

「うゝん・・・全部」

と笑顔で言う。

「何聞いてんだよ？おまえ」

水泳教室に行くときも

「なら行つてきます」

「気をつけてね」

と俺が出ようとする

「私も一緒に行く!!」

「ダメよ？お兄ちゃんは今から水泳教室なんだから」

「お兄ちゃんと一緒じゃなきゃヤダ!!」

と泣きじゃくる美波

「ガマンしなさい!!後でまた会えるでしょ？」

「へゝお兄ちゃんのことそんなに好きだったんだね。」

「うん、でも欠点があつて・・・」

俺は昔からかわいい女の子をみると

「ねえー一緒に遊ぼうよ」

と追い回していたそのたびに

「お兄ちゃん浮気しちゃダメ！！私がいるんだから」

と美波に止められたものだ。

「・・・っただから」

「あの園田先輩パーティーのときの人みたい」

（その人なだけど・・・）

そんな妹と別々に暮らすようになったのは俺が小学校に入った頃だった。

その日もこんな暑い日だった・・・

両親はいつもケンカはたえなかったが仲はよかった今の智明とメイカちゃんのように

「また朝帰り？たまには早く帰ってきてよ」

「うるさいな仕事だったんだよ、仕方ないだろ」

「へーこれが仕事？」

とポケットの中からキャバクラの名刺がでてきた

「それは・・・」

「はい不眠の刑」

「今から24時間眠ってはいけません」

「なんでだよ」

というふうに。

しかし、その関係はもろくも崩れ去った・・・

それは突然だった

「祐一、美波来て」

と呼び出される俺たち。

来てみると母親と父親がならんで座っていた

「いい？よく聞いてね？」

「お父さんとお母さん別々に暮らすことにしたから」といきなり言い出された俺は遠くにいった気がした。

「なんだよ、いきなり？冗談いつてんじゃねえよ」

「冗談じゃないぞ」

「ほら、これ」

と離婚届を見せる母親。

「嘘だろう？嘘って言ってくれよ、ドッキリかなんかだろ？なあ」と俺が言うと2人はうつむいた

「それで、祐一が私と、美波はお父さんと暮らすから」

「ちよつと待つてよ。なんだよ、勝手に決めんじゃねえよ！！」

「俺たちはどうなんだよ？俺たちは無視かよ！！」

「そつだよ、お兄ちゃんと別々に暮らすのイヤよ」

「わかつてちようだい・・・」

と涙を流して言った。

「わかんねえよ、わかつてたまるかよ！！大人の都合なんか。いいな大人なんでも好き勝手に決められて、それでいつも俺たち子供は振り回される。早く大人になりたいよ」

「行くぞ、美波」

とおれは美波を連れて自分の部屋にこもった

「私お兄ちゃんと離れ離れになっちゃうの？」

「わかんねえ」

俺たちは混乱していた。

（何があつたのかわかんねえけど、いきなり言うことないだろ！！）それはいきなりあんなこと言われて整理がつくはずもない。

6歳と5歳の子供なら尚更だ。

「私イヤだからねお兄ちゃんと離れ離れになるなんて」

「俺だつてイヤだよ。でもこれは俺たちにはどうにもできないことなんだ」

俺はすぐく何もできないもどかしさを感じた。

そして夏休みに入つてすぐ父親と美波がでていった。

「お兄ちゃん、今度会ったら私お嫁さんにくれる」と車から乗り出してさけぶ

「わかった」

「絶対だよ」

「へえ、なんか美波ちゃんの別の一面が見えた」

「え？どんな？」

「美波ちゃんはブラコン」

「ブラコンいうな!!」

「あ、よく寝た。でも久しぶりにあんな夢みたな・・・」

「なんでだよ」

「だってそうでしょ？」

と智明とメイカがいつものようにケンカしている

「やめろって智お前も悪いんだから」

「やめなさい、メイカが原因でしょ？」

「やれ、やれ、もっとやれ!!!!」

「お前は引っ込んでろ!!」

「浜島君はだまってて」

と飛ばされる

「ちょっと倉田さん!!!!」

「また、菜々ちゃんを!!いつもやめなさいって言ってるでしょ？」

「これは私達と倉田さんの問題なんだから口をはさまないで」

「明らかに怖がってるでしょ？」

「うるさいわね!!」

と2人はそんな過去を微塵も見せず、今日も相変わらずの日常を送っている

第16話 誕生日プレゼントを・・・

園田の誕生日のちょうど1ヵ月後は俺の誕生日である。

その誕生日に近づいてきたある日

「そういえばもうすぐ夏休みだね」

「いつからだっけ？」

「20日に終了式だよ」

「中学最後の夏休み遊びまくるぞー!!」

と俺たちはいつもの5人で帰っていた

「お前、受験生だろ？少しは勉強しろよ」

「時期にな」

「私もばーつと遊びたい」

そしてその夜

君が思い出になる前にもう1度笑って見せて

とメイカのケータイがなった

「はい、もしもし、あ！里奈ちゃんどうしたの？」

「あのね？週末買い物に行かない？」

「いいよ別に。とくに予定無いし。うんうんわかった地神のトラ広場に2時ね」

「なんでだろ？まいつか」

それから週末

「お待たせ」

「私も今来たところ」

2人は歩き始めた

「で何買うの？」

と里奈に聞くと

「水着買おう？」

「そっか。そういう時期だもんね」

と納得するメイカ。

「どこで買う？」

「そういや、この間国道道路沿いに地神コアができてたような」
「なら、そこ行ってみよう」

と2人はその地神コアに行くことにした。

「すっごい！！ひろい」

といつまでもはしゃぐメイカ。

「はしゃがない！！えっと水着売り場は・・・5階だって」

そして2人は5階へ向かった

「すごい！！！！なんでもあるんだね」

「そうだね」

ただただ感心する2人。

「お客様、何をお探しでしょうか？」

「いや、まだ見てるだけなんで」

「そうですか。それなら何かございましたら、なんなりと申しつけ
ください」

「はい、わかりました」

「選ぼうか」

と2人は選び始めた

（あいつ私の水着姿なんていつてくれるかな・・・って何考えてんのよ！！！！なんでこんな時にあいつがでてくんのよ！！！！）

「これどう？」

「うん・・・ぱつとしないな。地味。メイカらしくない」

「里奈ちゃん！！これイケるって！！里奈ちゃんにぴったり」

「そうかな・・・」

と2人は水着を選んでいく

「よし！！これだ！！メイカいいよ」

「里奈ちゃん、やっぱりこれだよ」

と2人は水着を決め、店を出た。

「智？もうすぐ誕生日だろ？」

「うん？そうだっけ？」

「おいおい、自分の誕生日ぐらい覚えとけよ？」

「たく人の誕生日には敏感なんだから・・・」

「で、いつなのよ？塚瀬君の誕生日って」

「21日だけど？」

「お前、なにがいい？プレゼント」

「いいって、別に」

「おまえ、毎年、毎年遠慮すんだから。誕生日ぐらい欲しい物言え
って」

（欲しいもの・・・？桜井メイカ・・・ってなんであいつなんだよ
！！てか物じゃねえし何考えてんだ。）

「別に、遠慮なんかしてないって。それに別に欲しい物ないって」

「そうやってまた茶化す」

「茶化してないって」

（そっか、もうすぐ誕生日なんだ）

その放課後里奈とメイカの2人で帰っていた

「誕生日か・・・塚瀬くん。」

「それで？買うのプレゼント」

「当たり前でしょ」

と言うと

「へっ」

と里奈が疑うようにメイカの全身をジロジロ見た

「勘違いしないでよ！！あいつが忘れるくらいの日だからかわい

そうだなって思っただけよ。ホントはイヤなんだけど・・・」

（いつものメイカね）

「欲しいのないって言ってたけど、なんかあるかな？」

「うっん」

と2人が考えていると

「あ！靴！！」

と思い出したようにメイカは大声を上げた

「靴？」

「うん、この間靴を欲しいなって目で見てた」

「たぶん、お兄さんかお姉さんのお下がりだからよ。あと服もね。」

「1つも自分のなんて無いんだから。智明の家ってなんだかんだで家計が苦しいのよ。だから欲しい物はずっとガマンしてきたんだと思う。」

「あいつ・・・」

こうしてプレゼントは決まった。

そして1週間後

ほんの小さな出来事に愛は傷ついて

と朝早く俺のケータイがなった

「もしもし？」

「もしもし、塚瀬くん？9時にこの間のところね？」

と用件だけを言われすぐに切られた。

（なんだよ・・・まさか・・・）

と俺はこの間のことを頭によぎった。

「誰が行くかよ」

とまた寝てしまった

ほんの小さな出来事に愛は傷ついて

とまた俺のケータイがなった

「ちよつと！！塚瀬君、早く来なさいよ！！何時だと思ってんの？」

と時計を見ると10時だった

「いかねえよ」

「なに言ってるのよ！！これは命令よ」

「お前こそ何言ってるんだよ！！」

「とにかく絶対くるのよ！！」

結局渋々行くことになった。

来てみるとそこには里奈もいた

「でなんだよ？また荷物持ちか」

「何言つてのよ、塚瀬君がいないと始まらないんだから」

「そうよ。智明」

「ちよつと、待てよ」

と2人はそれぞれ俺の腕を掴み強引に靴屋に行った。

「どういうつもりだよ？」

「智明のプレゼントよ？メイカが買おうって言い出したの」

「へ」

「勘違いしないでよ？あんたが忘れるくらいの誕生日だからかわいそうなだけよ。ホントはイヤなんだからね」

（こいつ・・・）

「あのな？お前に同情されてもこれっぽっちも嬉しくねえの」

俺はそう言いながらもとても嬉しかった

「すいません、今最後の1つが売れてしましまして」

「そうですか」

と店を出る

「なんで、売り切れるのよ！！」

「まあ仕方ねえよ。限定品だから。たぶん今はどこも売ってねえと思う」

「どうしてくれんのよ？この時間無駄だったじゃない」

「知らねえよ。そんなこと！！お前が勝手にこの店に入れたんだろぅが！！」

「本はと言えばあんたが欲しそうに見るからいけないんでしょ？」

「なんでそうなるんだよ！！」

「ちよつと2人とも？外でやめてよ。しかも大声で周りの迷惑ですよ？」

と言うが里奈の声は全く聞こえない。だんだんイラついた里奈は「いい加減にしなさい！！！！ここがどこだとおもってるの！！！！」

と一番大きい声で叫んだ。そしてケンカは収まった

「里奈が一番ここがどこかわかってないよな？」

「そうそう、この間も・・・」
「まじで!!!」

と小さな声で話しながら次の靴屋に向かった

「うーん、これは派手すぎる」

「ねえ？これどう？」

みんなにみせるメイカ。

「それカツコイイじゃん」

「確かにカツコイイけど、智明にはあわないわね」

「そっか」

としよげるメイカ

「イヤなわりには真剣じゃない。やっぱ相手が智明だから？」

「なんでそうなるのよ!!!選ぶからにはちゃんと選びたいだけよ。勘違いしないでくれる？」

「へー園田くんにはSチップスのサッカー選手のカードだったくせに？だれだったっけ？レンサクレス。イングリッド代表の」

「仕方なかったのよ!!!あの時お金が無かったんだから」

「そうですか」

（メイカらしいわね？）

「ならこれは？」

「いいじゃんこれ!!!決定ね」

こうして俺のプレゼントは決まった。

（誕生日プレゼントなんて何年ぶりだろ？）

「里奈、桜井ありがとな。大事にするよ」

「どういたしまして」

と2人同時にいう。

（今度は服を選んであげよう）

と思うメイカであった。

第17話 終電を・・・

あの買い物から数日後俺は15歳の誕生日を迎えた。そして中学最後の夏休みが始まった。そんなある日のことだった。

「やったー！！待ちに待った夏休み！！何して遊ぼうかな」と受験生とは思えない発言をする浜島

「たく祐一は気楽だな？」

と俺

「そうか？」

と浜島は不思議そうに聞く。

「そうだよ」

と里奈は呆れる。

「これから受験まつしぐらってのに」

と俺も呆れていた。

「俺にはもう関係ないもんね」

とわけのわからないことを言い出した浜島

「どういうことだよ？」

と聞く俺。

「そっか！もう決まったんだろ？確か」

園田は思い出したようにいった。

「うん。花川つてとこ」

と浜島は答える。

「あゝそこ確かテニス強いよな」

園田「いや、あそこはスポーツ全般強い。野球部は5年連続春も夏も甲子園でて、水泳部もインターハイ3年連続優勝者だしってるし、サッカーも6年連続国立行ってるし、テニス部に至っては10年間ずっとシングルス、ダブルスともにベスト8独占状態、しかも団体12連覇中。まさに化物って人ばかりいるんだよ。あそこは」

「すげーじゃん！！祐一」

その夜

ほんの小さな出来事に愛は傷ついて

「もしもし？あー里奈どうした？」

「明日、みんなで遊ぶことになったんだけど」

「それで？集合場所は？」

「いつもの白多駅の鈴のところに1時ね」

「わかった」

そして翌日

「だれも来てねえ見たい」

時計は12時55分だった

（珍しいな、この誰もいない）

するとすぐにメイカがやってきた

「あれ？みんなは？」

「まだ来てねえ見たいけど」

「ならばばらく待つところ」

「ああ」

しかし1時をすぎ、15分経っても、20分経ってもみんなは来ない
仕方ないので

1人1人に電話した。

「はい、もしもし。うん？智明？どうした？はあーあ」

「もしかして寝起きか？」

「ああ、今起きた」

「おまえな、何時だと思ってんだ？さっさと来い！！」

「はっ？何の話だよ？」

「里奈から聞いてんだろ？」

「だから何の話？」

「今日の遊ぶって話」

「聞いてないよ。そんなこと！！それに今日無理だし」

「そっか、わかった。」

「すまん」

「いって別に。それじゃーね」

電話をきった

「なんだって？」

「なんか、聞いてなかったって。あと今日は無理だと」

「そう」

その後も

「・・・って話なんだけど？」

「へー俺もナンも聞いてないぞゴホツゴホツわかった今から行くゴホツゴホツゴホー！」

「無理言うな！！おとなしく寝てろ！！」

そして肝心の里奈と言うと

「ホントゴメン！！父方のおばさんが昨日亡くなっちゃってお通夜に行かないといけないのホントゴメンね」

「いいよ。仕方ないだろ。うん。うん。わかった」

「里奈も無理みたい・・・」

「もしかして2人きり？」

「そう・・・なるな」

俺は急にドキドキしてきた

（なんでドキドキしてんだろう？意識してる？）

（なんでこいつと2人きりなのよ？）

と突然メイカは自分の部屋でのことを思い出した
お互いに顔が赤くなっていた

「なに、顔赤くなってんだよ？」

と聞くと

「別に赤くないわよ！！そっちこそ何赤くなってんのよ」

「俺だって別に」

「私、帰る。あんたと一緒にじゃ楽しめるものも楽しめないわ。それにこの間みたいいきなり倒れられても困るし」

「これは、こっちのセリフだ！！おまえとなんかと。つつことでじ

やーな。気をつけて帰るんだぞ」

と帰ろうとすると

「待ちなさいよー！！なにホントに帰ろうとしてんのよー！！せっかく2人だけだけど集まったんだから、少しは付き合いなさいよー！！」

「なんだよ、それ。」

「行くわよ？」

「ちよつとどこいくんだよ！？」

「行きたいところがあるのよ」

と俺は強引にメイカから手を引かれた

「で？ボウリング？」

「そうよ悪い？」

「別にいいけど。」

「勝負よー！！勝負」

「へいへい」

「塚瀬君が勝てばいままでやってたことをなしにしてあげる。要するに私の言いなりから解放してあげる」

「本当か？」

「ええ女に二言はない！！」

とボウリング勝負になったのだが・・・

5フレームまでいき

「おし！スペアだ」

と好調な俺に対し

「おりゃー！！」

と投げるもガーターが続くメイカ

「ハハハ、これで6連続ガーター？ホントにやる気あんのか？」

と挑発する俺

（なによー！！自分ができるからって！悔しい！負けたくないあんなやつだけには）

と挑発に乗るメイカもメイカである。

そして1ゲームが終わった。

俺108

メイカ 16

「やったー100超えた」

そして俺はメイカをみて

「16?ありえねえー!!どうしたらこんなスコアになるんだ?」

「仕方ないでしょ?ボウリング苦手なんだから」

「こんなスコアじゃ勝負に勝ってもちつとも嬉しくねえよ!!この勝負はなしな」

「ふーん。そんなに私にこき使われないんだ?」

「そんなんじゃないよ!!これじゃいじめてるみたいでいやだつってんの。」

「変にやさしくないでよ、気持ち悪い」

「なんだと!!」

「なによ!!」

「しっかし意外だな。桜井にも苦手なスポーツあったなんて。なんなら俺が教えてやるよ。」

「絶対イヤだ!!あんたに教えてもらうぐらいなら死んだ方がましよ。」

「別にいいんだぜ?それでも。ボウリングの後ホラー映画でも見に行こうかな?どうしようかな?」

「わかったわよ。そこまで言うんだったら教わってあげてもいいわよ?」

とメイカは教わるためにボールを持つ。

「あれ?お前左利きだったか?」

「あ、うん。こういう時は左のほうが投げやすいんだ。」
「へ」

「まずこうして」

と言って俺はメイカの体に密着し両手を掴んだ

(あの甘い匂い。って俺何考えてんだよ?バカ!!)

「ちよつと。私に引つ付かないでよ!!」

「し、仕方ネエ〜だろう！！教えるんだから」

お互い顔が真っ赤になりしばらくこちない雰囲気 flowed.

それから俺は左ということで苦戦しながらもメイカにいろいろとレクチャーした。

その甲斐あつてかメイカはみるみる上達していった。

終わる頃にはストライクを連発で全く歯が立たなくなっていた。

俺の教え方も良かったのだろうが、やはり、メイカの身体能力の高さには改めて驚かされた。

その後カラオケに行き珍しくお互いの歌声を褒めあい顔が赤くなり、ゲーセンに行き人気の格闘ゲームでメイカと対戦してメイカは俺が勝つたびにムキになりどんどんお金を費やしていった。

気づくとあたりは真っ暗になっていて街灯が灯っていた。

「やべ〜もう11時30分だ。電車大丈夫かな？」

「とりあえず走ろう？」

「おう」

俺たちはひたすら走った。しかし・・・

「ただいま23時43分の野口行きの電車は全てなくなりました。

明日の・・・」

終電を逃してしまった

(どうしよう・・・)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1687d/>

TM～休載中～

2010年10月9日03時23分発行